
いちごミルク

田島 姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちごミルク

【Nコード】

N9602V

【作者名】

田島 姫

【あらすじ】

【気付けばあなたはドアの前】【その悩み、あなたの世界の力では解決できないよ？】【ドアを開けた時点であんたの悩みは解決されたも同然だから】…………俺達が住む人間界とは違う世界。魔陣界。筆法陣を描くことでいろいろな力を操ることができちゃう。魔法だって召喚だってなんでもオツケー！俺達がいるこの世界と魔陣界をつなぐことだってできちゃいます！！でもそのせいでこっちの世界に悪影響が出ることもしばしば。そんな事態を最小限の被害で食い止めるべく（最小限でも被害が出ちゃってるじゃんって突っ

込みは受け付けないよ！）、はざまの部屋で活動するツンデレマイ
スイートハニーとそんなマイハニー一筋の俺が、さまざまな試練を
乗り越えて愛を育んでいく物語！え？違うつて？？まあまあま
あ、ほんとはどんな物語なのか、知りたかったら読んでみてよ！！・
・・・・

始まりのドア（前書き）

このお話はフィクションです。

現実世界のものとは一切関係ありません。

すべて私の妄想です。

処女作となりますので、さぐりさぐりやっていききたいと思っています。

基本ファンタジーですが、時々恋愛も入ります。

お手柔らかによりしくお願いします。

始まりのドア

さて、俺はなんでこんなところを歩いているんだ？

ふと気付けばビル街のど真ん中を歩いていた。

人並みはまばらだ。

なんだか俺という人間がここにいるってことに誰も気付いてないみたい。

あたりを見回すが、誰とも目は合わない。

でもその行動に悪意は感じられない。

―俺はここにいるけれど、俺しかその事実気付いていない―

それなのに『孤独を感じる』というのとは少し違った気がした。
不安な気持ちもなかった。

でもそれが一体なんなのか、今の俺には説明できそうになかった。

ふと、とあるビルの前で足が止まる。

もちろん人の気配は感じられない。

だからといって、寂れているわけでもない。

―俺はここに来たかったのかな―

直感的にそう思った。

誘い込まれるようにビルの階段を上り始める。

一步一步上っていけばいくほど、なんだか暖かい気持ちになった。
それは『ワクワクする』、そういう気持ちに近い気がした。

階段を上りきった今、目の前にはなんの変哲もないドアがある。

テレビドラマの中にあるような、探偵事務所のドアのようだなと思った。

だけど、そこには看板らしいものは一つもない。ただドアがある。

それだけだ。

でもそれだけでいい気がした。

ドアがある。

そのことが重要な気がした。

そしてドアがあるなら、やるべきことは一つだろう？

——きつとこのドアを開けたら、楽しいことが待ってんだろっな——

またも直感的にそう思った。

理屈なんかありやしない。

俺は迷わず、そのドアに手をかけた。

これが俺の物語の始まり。

始まりのドア（後書き）

2011・9・04 手直ししました

俺はおきやくサマ？

ドアは思っていたよりも軽く、すんなり開いた。

俺の中の勝手な想像ではもっと物々しい感じだと思っていたのに・

・
ちよつと拍子抜け。

誰もいないその部屋の中は、やっぱりテレビドラマで見たことあるような探偵事務所のようなだ。

だけど誰かが使っているにはキレイすぎる気がした。

床にはチリ一つないし、どんだけ厳しい姑さんが見てもほこりは見つけられそうにない。

生活感がないんだな、たぶん。

ゆつくり足を踏み入れて、後ろ手でドアを閉めると、どこからともなく声が聞こえてきた。

「るーるるー、るるるるー」

歌ってる？

声の雰囲気は子供のようだ。

その歌声はだんだんここへ近づいている。

「るるっ、るるっ、るんるんるん！」

ガチャ！

突然俺から見て右側にあるドアが開いた。

ドアが開いたのは見えただけ、俺の視線の先には誰もいない。見えるのは俺の腰上ほどの高さがあるうかくらいの棚だけだ。でも足音が・・・

「うきゃっつ！」ガシャーーン！！

び、びっくりした。

叫び声とカップらしきものが割れる音とともに、俺の少し先で小さな小さな女の子がお盆を両手で持ったまま、うつぶせになって倒れている。

それでようやく理解した。

棚よりちっちゃけりや見えるわけないよね・・・

「あうう、いたいデス。

ナンデいつもなにもないトコロでころんでしまっんデシヨウか」

「あ、大丈夫？」

そう声をかけた俺を女の子はうつぶせの状態で見上げた。

そしてとびきりの笑顔で

「ごシンパイにはおよびません、おきやくサマ。

これはイツモのことなのデス！」

そう言いながら、ゆっくり起き上がった。

「アア、またごシュジンさまにおネガイしなければ・・・」

女の子はそうつぶやきながら、割れてしまったカップをお盆の上に集め始めた。

中身は入ってなかったのが不幸中の幸いつてやつか。

「危ないから俺がやるよ」

女の子の手つきがあまりにも危なっかしくて見てられなかった。

せっかく怪我がなかったのに、そのまま見てたら余計な怪が増えそうだった。

女の子は素直に「おテスウおかけいたします」と、おじぎをした。

そして、近くのロッカーからその女の子のサイズにぴったりな箸とチリトリを持ってきた。

「われたブンはぜんぶキレイにあつめナケレバなりません」
またそうつぶやきながら細かい破片を集め始めた。

いろいろ疑問に思うことはある。

だけどそのいろんな疑問を、見た目年齢7、8歳の女の子に、怒濤のように聞くのも気がひけた。

だからとりあえず一番気になったことを聞いてみることにした。

「あのさ、さっき俺のことお客様って言ったよね？」

ってことはここは何か経営・・・お仕事みたいなことをしてるところなの？」

小さい女の子はチリトリに集めた破片をお盆に乗せて、満足げに言った。

「ハイ、いいマシタ！」

アナタはゴヨウがあつて、ココにいらっしやったノデス」

「え？俺、ここに用があるなんて言ってないよ？」

第一、俺はなんでここに来たのかすらわかってないんだから・・・
ってか、カップの細かい破片をお盆の上に乗せる意味はあるんだろうか？

「この子が言った通りだよ。」

あんたは必要にかられてここに来たんだ」

今度は突然後ろから声がした。

びっくりして振り向くと、そこには女性が仁王立ちしていた。

どうやら女の子と話したり、カップの破片のことを考えていたせいで足音に気付かなかつたらしい。

彼女はそのまま、割れたカップを拾っていた俺のことを見下ろしていた。

「あ、あの、いまいち意味がよくわからないけど・・・」

いきなり謎めいた言葉を言われてテンパる気持ちもあったけど、偉そうな態度ではあるけれど、なぜか嫌な感じはしないな、と思った。

「ごシュジンさま！おかえりナサイ！」

「ただいま。おまえ、またカップ割ったのか？」

「ワタクシなりにキをつけてイルつもりなのデスガ・・・」

「まあいいよ。また直せばいいだけだし」

俺を無視して彼女と小さな女の子の会話は続いていく。

無視されていることよりも会話の内容のほうが気になって仕方なくて、割れたカップが乗ったお盆を持ちながら黙って聞いていた。

すると彼女が「とりあえずそこ座りなよ」と近くにあるソファを指差した。

向かい合わせになっているソファの間にあるテーブルにお盆を置き、俺は言われるがままにソファに座った。

そして彼女は反対側に座った。

相変わらず彼女は小さな女の子と会話を続けている。

「キヨウはどうデシタか？」とか「ほんとにあいつはタチが悪い」だとか、俺には会話の内容がさっぱりわからない。

その間、俺は正面に座る彼女を観察していた。

年齢は俺より少し年下に見えた。

25、6歳かな。

凜としているって言葉がよく似合う。

口調は男みたいだけど、黙ってれば女性的な顔立ちだ。

髪は真っ黒で、長い髪を一つに結んでいる。

さっきも思ったけど、眼力めぢからがすごい。

それもあって、彼女が言う言葉には説得力みたいなものがあつた。意味はわからないのに、きっとその言葉の通りなんだろうなと思わ

せる力があつた。

服装はなかなか特殊というか、俺の周りではあまり見ない格好だつた。

ロングコートなんだけど、腕の部分は半袖。

ショートパンツをはいていて、靴はもうそろそろ季節も夏に入ろうというのにロングブーツだ。

でも暑苦しさはない。

ふと胸ポケットに目をやると、キレイな万年筆が二本ささっているのに気がついた。

なぜかそれにすごく興味を惹かれていた。

「片づけ、悪かったな」

一瞬、万年筆に夢中で何のことだかわからなかった。

キョトンとしていると「なんつー顔してんだよ」と彼女は俺が想像するよりはるかにかわいい笑顔を見せた。

「こいつ、おつちよこちよいにもほどがあるつーか、ほんと抜けてんだよ。」

カップ割ったの、これで何回目だっけ？」

「もうオボエておりマセン。。。」

「あ、別に気にしてませんから。」

怪我がなくてよかったですよ」

「・・・ふーん、見かけによらず優しいんだな」

「え？優しくなさそうかな？」

「んー、つーよりもチャライ？」

・・・それは俺が前々から気にしていることなんだけど。

そんなことを考えてたら自分でも気付かないうちに顔をしかめちゃっ

てたらしい。

「あー、悪い。」

あんたがどうこうってわけじゃないんだ。

ただ見た目がチャライヤツにいい思い出がないっつーか、ついさっきまでそういうヤツと絡んでたもんだからさ。

完全に八つ当たりだった。気にさわったんなら謝るよ」

さらっと暴言はくくせに、相手の反応には敏感というか、彼女のそういうところは嫌いじゃないと思った。

「いや、俺も君に言われたのがどうこうっていうんじゃないから。チャラいつてことに俺もいい思い出がないだけ。

だからそんなに気にしないでよ」

そんな会話をしていたらソファの横に立っていた女の子が「ごシユジンさま。おシゴトのおハナシはいいのデスカ??」とさっきとは一変、真面目な顔をして彼女に聞いた。

「あっ・・・だな。」

いつも話がそれちまう。

じゃあ突然だけど、あんたがここに来た理由を教えてやるよ」

急に本題に入って俺の顔がこわばったのか、「心配することねえよ」とまた想像以上に柔らかない笑顔で彼女は言った。

「なんでかはわからないが、気付けばあんたはドアの前にいた。違うか?」

俺はおきゃくサス? (後書き)

2011.9.5 手直ししました。

知らない世界と知らない力（前書き）

ちよつとシリアスな部分入ります。

でも基本は明るい男なので、そのうちチャラくなる予定です（笑）

知らない世界と知らない力

彼女の言葉の通りだと思った。

途中いろんなことを考えはしたけれど、あのドアの前に立つまで、ただひたすら歩いていたんだから。

「えっと、そう、ですかね。」

なんだかうまく説明できないけど・・・
引き寄せられたっていうか」

「ここに来る人達はいつもそんな感じだよ。」

うまく説明できないのはあんたに限ったことじゃない。

で、ここに来る人達はみんな同じような悩みを抱えている」

「同じような悩み？」

「あんたも悩み、あるだろ？」

彼女の問いかけに思い当たることはたくさんあった。

「思い当たることあんだろ？」

念を押してきた彼女の言う通りだったけど、俺は思い当たったその出来事を彼女に話すことを躊躇した。

だってそれはどんなに必死に訴えても、『誰にも信じてもらえなかった』から・・・

「心配すんなよ。」

あたしはあんたの話、信じるよ？」

彼女のその言葉に俺は目を丸くした。

この人は人の心を読む能力でもあるんだろうか？

「ふっ、言つとくけど、あたしは人の心とか読めないから。」

ここに来る人達の悩みは、そっちの世界の人間には信じがたい内容ばかりだからね」

「そっちの世界？」

それってどういう・・・？」

「ま、あたしとあんたは生きてきた世界が違っただよ。
見た目はおんなじような人間だけだな」

「えっと、ごめん、話が見えない・・・」

「まー、口で説明するより、見せたほうが早いわな」

そう言っただけで、小さい女の子に近くにある冷蔵庫からお茶を取ってくるように伝えた。

そして彼女は話を始める前に、テーブルに置いてあった、割れたカップの乗ったお盆を自分のほうへ引き寄せた。

「あんたの世界の常識じゃ、一度割れたカップは完璧に元には戻らないだろ？」

「え？まあ破片をくっつけて同じようにすることはできても、元には戻らないでしょ」

彼女はいったい何を言い始めたんだろうか。

さすがに今回ばかりは思いつきり疑いの目で彼女を見た。

「まあまあ、そんな目で見んなよ・・・」

お、サンキュ」

そこへ小さな女の子がお茶を持ってやってきた。

そして俺の顔を見て「そんなにコワイかおは、あなたにはニアイマセンよ？」と、首をかしげて真っ直ぐな瞳で見つめられた。

「あ、ああ、ごめん」

「だいじょうぶです。」

「ごشینさまはすごいヒトですカラ！」

小さな女の子は、またもとびきりの笑顔でそう言った。
でも何が大丈夫なんだろう？

彼女の何がすごいんだろう？

「じゃ、始めるか」

そんな俺の疑問を知ってか知らずか、楽しそうに彼女はなにやら準備を始めた。

さっきなぜか惹かれた万年筆のうちの一本を、胸ポケットから取り出しキャップを外した。

ボディカラーは白で、ペン先やキャップリングの部分がゴールドでキラキラ輝いている。

知識のまったくない俺でも、それが高級なものだろうことは理解できた。

でも万年筆でどうやってカップを直すっていうんだ？

そっぴや万年筆の持ち方がなんか変だ。

普通にペンを持つ感じじゃなくて、チョーク持つような・・・
ダメだ、考えても疑問しか出てこない。

そんなことを考えていたら、「ちゃんと見てるよ？」と、彼女は俺に不敵な笑みを見せた。

おもむろに、彼女はお盆に乗った割れたカップの上に万年筆で何かを描き始めた。

カップの上。

そう空中に円を描いている。

彼女が万年筆を走らせると、そこには輝く線が浮かびあがった。

俺は頭がおかしくなったのだろうか？

「普通の人間は、こんなん見たってすぐには信じられないさ」

彼女がまた、俺の心を読んだかのようなタイミングで話し始めた。

「今描いているのは筆法陣ひっほうじんと言う。

あんたには、これがただの高級そうな万年筆にしか見えないかもしれないけど、あたしらの世界では筆法陣を描くために必要不可欠なものなんだ」

そんなことを聞いてるうちに、どうやらその『筆法陣』なるものが

完成したらしい。

もう俺は、目の前で起きているこの現象を受け入れることに必死だった。

でも頭のどこか隅で、筆法陣つてもっと複雑なのかと思ったけど案外簡単な形なんだな、と冷静に考える俺もいた。

完成した筆法陣をカップの上に浮かせたまま、彼女は話を続けた。

「筆法陣を描くことで、いろんなことができる。

よく魔法使いが火の玉出したりするだろ？

あんなこともできる」

「え！？魔法使えんの！？」

驚いた俺は、つい口調が馴れ馴れしくなってしまった。

でも彼女は特に気に留める様子もなく、話を続けた。

「んー、呪文唱えて出すわけじゃねえから、ちよつと違う気もするけどな」

「ホカに、ワタシたちのせかいのヒトたちをコチラへよぶコトもできマス！」

「ええっ！？召喚もできんの！？！？」

そこまでいったらゲームの世界の話じゃん！！」

俺があまりに興奮しているので、彼女と小さい女の子は顔を見合わせて笑っていた。

「落ち着けよ（笑）」

とにかく『筆法陣を描くこと』が、あたし達の世界の人達が使える力ってこと。

で、カップに話を戻すけど、この筆法陣を使うとカップはどうなるか、よく見とけよ？」

驚きの連続で若干興奮ぎみの俺を制して、彼女はカップの上に描いた筆法陣を、万年筆の先でちゃんと突いた。

するとその筆法陣は淡い光を放ち、カップへゆっくりと落ちていっ

た。

そしてそのままカップを通り抜けた。

・・・と、思った時にはもうカップは元通りになっていた。
割れる前のキレイな状態に。

そして筆法陣はもうそこには存在しなかった。

こん時の俺の頭の中では、とんでもない数のハテナマークが飛び交っていた。

「見ての通り、カップは元通りになった。

今使った筆法陣では、物質の時間のある一定時間前の状態に戻すことができるんだ。

今は一時間前のカップの状態に戻した。

もちろん前の状態に戻すためにはその物質のあるべき部分がすべてになる。

だから誰かさんは必死で細かい破片も集めてたわけ。」

「かつぶがもとドオリになりマシタので、おチャをドウゾ、おきやくサマ！」

「その誰かさんのせいで、ここに来てからお茶出すまでだいぶ時間経っちまったけどな」

「モウ！それはイワナイおやくそくデスヨ、ごシュジンさまー！」

そんな二人の会話を俺はうつむきながら聞いていた。

俺の頭の中は相変わらずハテナマークが飛び交いっぱなしで、ただ何をどう質問したらいいのかわからずにいた。

小さい女の子が出てくれたお茶を飲むという行動もできないくらいに混乱していたんだ。

あまりにすごいことが立て続けに起こると（それがどんなに良いことであっても）、興奮とかそういうのを通り越して恐怖すら感じるのだと俺はこの時初めて知った。

そんな俺の様子を見て、彼女は少し真面目な声で俺に話しかけた。
「今起こったことをきちんと理解するのは時間がかかると思う。」

ここに来た人達が、自分が生きてきた世界と違う世界があるとか、筆法陣があるとか、そういう自分の知らない事実を突き付けられて、混乱してるのを何回も見てきてる。

だからすぐに受け入れるとは言わないよ。

でも、これだけは言える」

彼女はそう言っただけで黙った。

俺はうつむいたまま、その先の言葉を待ったけど、彼女はいつこうに話そうとはしなかった。

沈黙は続く。

きつと彼女は、俺がこの現実になんと向き合っただけのを待っているの
だろう。

この沈黙の時間は、彼女なりの気遣いなのかもしれない。

―逃げたくても逃げられない―

―嘘は一つもない―

―すべてが現実―

―なかったことにはできない―

―もう前に進むしかない―

そう、俺はもう前に進むしかないんだ。

失いたくないもの、たくさん失った。

よく考えたら怖いものなんてもうないのかもしれない。
だから覚悟を決めて顔をあげた。

「あんたが抱えているその悩み、あんたの世界の力では解決できないよ？」

それはきつとあたし達の世界の力の影響だから」

真剣な眼差しは刺さるくらいに真っ直ぐで、冗談は一つもないことは明らかだった。

まだどんな悩みかも俺は言っていないのになあ。

もし彼女ができないのが悩み、とか言ったらどうするつもりなんだろう？

試しに言ってみるか？

そんなくだらないことも考えたけど、俺の中でどうするかははっきり決まっていた。

―たぶん、俺を救ってくれるのは彼女しかない―

「・・・あのさ、うまく話せるか自信ないけど、俺の悩み、聞いてもらえるかな？」

知らない世界と知らない力（後書き）

次の話から彼が何を失ったのかわかります。
2011・9・4 手直ししました。

俺の悩み(1)(前書き)

ここから少し説明っぽい部分に入ります。

俺の悩み（１）

今年の春はとても桜がキレイだった。

実際のところは去年となんら変わらない満開の桜だったけど、俺は今年の桜が今まで見た中で一番だと思った。

それはきっと俺の心境が大きく関係していたんだと思う。

普通の家庭に生まれて、普通に学校通って、成績もそこそ良くて、見た目もどつちかといえバイケメンと呼ばれる部類に入ってた。

だから女に困るってこともなかった。

こんな言い方すると女遊びが激しそうなイメージを持つかもしれないけど、記念日とか大事にしたり、浮気なんか絶対しなかったし、彼女の希望はなるべく叶えたり、もちろん俺から振るようなことはなかった。

残酷なもので、チャライ見た目と似つかぬその恋愛スタイルを彼女としては求めていなかったようで、想像より刺激の少ない俺の意思とは無関係に、彼女達は自らピリオドを打っていった。

一人暮らしは、仕事に慣れたらすぐ始めた。

別に親との仲はうまくいったから、実家に住んでもよかったんだけど、その時付き合ってた彼女に強くお願いされた、っていう理由からだった。

ちなみに両親は大学２年の頃に離婚していて、俺は父親に引き取られていた。

母親が他の男と一緒にになった。

それも今のご時世よくある話だ。

料理・洗濯・掃除、家事と称されるものは割と得意だった。

父親も比較的家事が得意なほうだったけど、まかせきりにするわけ

にもいかなないので、自分もなにかと家事をやる機会が多かった。

部屋に初めて遊びに来た友達は、必ずといっていいほど「見た目チヤライのに部屋がすごいキレイだね」って、驚きながら全世界のチヤラ男を敵にまわすような発言をしていた。

その後、一人暮らしを熱望した彼女は、「何もできないだろうから、私がしてあげる」という理想像を粉々に打ち砕かれ、彼女のプライドを俺は気付かないうちに傷つけてしまったため、何カ月かして突然振られることとなる。

仕事はサラリーマンになるのは性に合わない気がして、大学を卒業した後、小さい頃から好きだった雑貨に関われる仕事を選んだ。人に関わるのも嫌いじゃなかったから、両方関われる販売職に就いた。

接客業のアルバイト経験もあったし、仕事の飲み込みも早かったから、お決まりの見た目的イメージで期待されてなかった分、周りの評価は右肩上がりだった。

いつも裏目に出る見た目のチヤラさがいい方向に転がったパターンだ。

そして最初のうちに人間関係さえどうにかしていれば、仕事でうまくいかないことがあっても、なんとかカバーしていけるものだ。

そして去年の夏頃、勤めている雑貨屋が新店を出すから店長にならないか？と提案されたのだ。

今まで働いてきた店を離れるのはすごく淋しかったけど、どんな状況であつてもまずはやってみる、というのが俺のポリシーだったから、すぐにその話を受けた。

実際にオープン準備が始まってからは、何をすべきか悩むことが多かったけど、基本前向きに考えるタイプだから、その悩んでいる状況すら楽しんでいた自分がいた。

だから今年の春を迎えるまで、俺は何不自由なく生きてきたんだ。
就職難のこの時代にちゃんとした仕事がある。

浪費家でもないから貯金もそこそこある。

安心して眠る場所がある。

一緒にバカ騒ぎできる仲間や友達がいる。

無いものがあるとすれば彼女の存在だったけど、いつものように勘違いされて別れる、の繰り返しなら、いなくてもいいかなと思うのが正直なところだった。

仕事も忙しかったし、それなら仲間や友達というほうが気楽だった。

とにかく、何の問題もなかった俺の人生。

それがたった数カ月で、一気に天国から地獄に叩き落とされることになるだなんて、あの満開の桜を見ていた時はまったく予想もしなかった。

新店がオープンしたのは桜が散り始めた頃だった。

仕事内容はさほど変わってないとはいえ、働く人間はほとんどが新人だ。

もちろんヘルプとしてベテランさんも来てくれるけど、自分の店もあるわけだから、そんなに長時間、もしくは長期間来てくれるわけじゃない。

それでも大助かりくらい、てんでこまだった。

そうして助けてもらったり、後に回せることは回したりして、一日一日やり過ごしていた。

でもどこかでそのツケをリセットしなければならない。

それができるのはお客様がいない時間、つまり閉店後だ。

アルバイトの子を残業させることもしばしばあったが、結局後回しにしてこのほとんどは自分の業務だったから、必然的に俺一人

が遅くまで残って仕事をすることになる。

店がオープンして一カ月が経った頃、その日も俺は閉店後、スケジュールの作成や雑貨の発注など雑務に追われていた。

なんとか仕事を片付け、時計を見ると夜中の12時を回っていた。

「うーん、今日も午前様か・・・」

ぼやきながら、店から出てふと空を見上げると、雲一つないキレイな星空がそこにはあった。

家は新店がオープンする少し前に新店の近くに引っ越した。

前に住んでいたところは居心地がよかったし、別に通えないことはなかったけど、先に店長になっていた先輩に「家は近いにこしたことはないぞ」と強く勧められて、引っ越しを決断した。

そして、その言葉の意味をこうしてまざまざと痛感することになるわけだ。

家と店は徒歩にして15分くらいの距離だ。

自転車で通勤していたけれど、その何日か前に、いたずらされたようにタイヤがパンクしていた。

まったく物騒な世の中になったもんだ。

帰り道は店の向かい側にある広い公園沿いを歩いていく。

公園の中を突っ切れば近道なのだが、俺はそこを通るのが嫌いだった。

昼間は子供達がたくさん遊んでいて明るい雰囲気なのに、夜になると途端に不気味になる。

緑が多いのは結構なのだが、公園の周りを隙間なく取り囲んでいるせいで、道沿いの街灯の光が公園内に差し込まないのだ。

幽霊とかはまったく信じないけど、昔から暗闇がダメだった。

大人になってほんの少しましになったけど、そんなに簡単に克服できるものでもない。

いまだに必ず豆電球をつけていないと寝られないくらいだ。
そんなわけでいつもは遠回りになるとはいえ、街灯がついている公園沿いを帰っている。

だが、その日は異常に疲れていた。

一刻も早く横になりたかった。

なんせ一カ月近くそんな生活だったから、体は限界にきていた。

「今日は星空がキレイだし、これなら公園内も少しは明るい……はず……」

無理やり自分に言い聞かせるようにつぶやきながら、横断歩道を渡って公園に入った。

歩きながら、やっぱり遠回りでもいつも通り帰ればよかったと後悔した。

星空効果は正直まったく意味をなさなかった。

暗闇が怖くない人からしてみれば、夜の公園なんてこんなものだと思うのだろうけれど、俺にはそんなに簡単に割り切れる問題じゃない。

「怖くない、怖くない……」

子供だましもいいところだ。ただひたすら怖くないとつぶやく。

そうでもない歩けなくなりそうだった。

必死で歩いていた俺だったけど、前方に明るくなっている場所があることに気付いた。

公園の出口の近くのトイレの壁の向こうから光がもれている。

その光は機械的な光とは違い、なにか温かみのあるものに感じた。

「あそこに何かあんのかな？」と考えていたら突然風が吹いた。

その風で俺は立ち止り、光から目をそらした。

それくらい強い風が俺を通りぬけたんだ。

それはまだ少し肌寒いこの時期になぜかモワツとへばりつくような

風で、感覚的にあまり気持ちのいいと思えるものではなかった。

視線を先ほどの光の場所に戻すと、そこにはもう光はなかった。

「誰かいたのかな？」

いや、俺の見間違いか・・・」

この時の俺は暗闇に対する恐怖と体の疲れでいっぱいだった。

だから光っていたことを肯定する前向きな気持ちは持てなかったし、
疲れてるからしょうがない、とあきらめるほうがよっぽど楽なことに思えた。

それに公園の出口はすぐそこだったし、あと少しで家に着くという
事実のほうが俺の心の中を圧倒的に占めていた。

公園でのことはベッドに入った頃には忘れた。

あと一日頑張れば休みで、その休みは久しぶりに会う高校の同級生
と飲む約束をしていたから、俺はもうそのことで頭がいっぱいになっ
ていた。

でも今考えればそこからすべてが狂い始めた。

あの風が、これから先俺が手に入れるはずだった幸せを全部奪って
しまったかのように。

俺の悩み(1)(後書き)

2011.9.5手直ししました。

俺の悩み(2)

次の日、かけたはずの目覚ましがなぜか鳴らなかったせいで、開店準備に30分遅刻した。

その日はたまたま前の職場で一緒だったヤツがヘルプに来てくれる日で、いつもは誰よりも早く出勤しているはずの俺がいないことを不思議に思い、電話をしてきてくれたのだ。

家が近くてよかったと心から思ったのはいうまでもない。

前にも言ったけど、俺は基本前向き思考だ。

なんかミスっても、いい意味でしようにしないと割り切れる。

もう二度と同じ失敗をしないようにすればいいだけだ。

それに過ぎてしまったことは確認のしようもない。

なんで鳴らなかったか考えたところで何の得にもならない。

幸い明日は休みだし、高校の同級生と飲みに出かけるのも夕方からだ。

目覚ましが鳴ろうが鳴るまいがそんなに困ることはない。

俺は残った仕事を済ませて、昨日より早い時間に帰路についた。

風呂からあがって、テレビを見ながらベッドに横になっていると、インターホンが鳴った。

新しい家のインターホンはちょっと古くて、訪問者を確認するにはのぞき穴を見るか、ドアを開けるか、どちらもドアの前まで足を運ばなければならない。

時間は11時を少し過ぎたところだ。

「こんな時間に誰だよ・・・」

半分夢の世界に足を突っ込んでいたのに、それを邪魔されてさすがにちよつとイライラしながらドアへ向かった。

いつもだったらのぞき穴で確認するのだけれど、めんどくさくてそ

のままドアを開けた。

ドアを開けた先には誰もいなかった。周りをキョロキョロ確認したけれど、誰かがいる気配もない。

「んだよ。」

今度はピンポンダッシュか」

つい最近自転車のタイヤがパンクしていたことを思い出した。

あれもこれも同じヤツの仕業かもなと思い、俺はあきらめの境地に立っていた。

こういうのは反応すればするほどひどくなっていくケースが多い。

ほっとくのが一番。

そう思い、ベッドに戻った。

するとまたインターホンが鳴る。

だが、今日はこのまま寝ると決心して、それからきたま鳴るインターホンを無視して夢の中へと落ちていった。

これは俺自身が幽霊とかそういう類のものの存在をまったく信じておらず、現実の人間のやっていることだと信じていたからできた行動である。

次の日はしっかり鳴った目覚ましだったけど、その後も時々誤作動を起こし、鳴らないことがあった。

正直また鳴らないかもしれないと思っていたし、それなら自分の力で起きる、という前向きにもほどがある考え方と、日々の生活のリズムから、なんとか同じような時間に起きることができたので、遅刻しそうになることはあっても、本当に遅刻をすることはなかった。

インターホンも人が寝ようとするタイミングで鳴っていたが、俺にとって寝るときに重要なのは音よりも暗闇のほうだったから、睡眠不足になることもなかった。

俺がどうこうよりも、近所迷惑になるからやめてくれないかなあ、

とそっちの心配ばかりだった。

一週間もすれば飽きるだろうと予想していたが、案の定そのくらいでインターホンは鳴らなくなり、なぜか目覚ましの調子も元通りになった。

いたずらが飽きてくれたなら、そろそろ自転車のタイヤ、交換しても大丈夫かなあとか、のんきに考えていた。

「アノお・・・おナカすきませんか??」

小さい女の子は正面に座る俺と、隣に座る彼女を恐る恐る交互に見ながら聞いた。

俺はその仕草がとてもかわいらしくて、つい笑ってしまった。

「ほれ、お前が緊張感のない発言するから笑われてるぞ」

「ダツテえ・・・」

「あ、ごめん。」

なんかかわいいなあって思ってたさ」

「ソナナ！わたし、おカシとってきマスね！」

そう言つて、猛ダツシュで女の子は最初に入ってきたドアの向こうに消えた。

「あいつ、マジで照れてやんの」

正面に座る彼女は面白いものを見たようにクッククツと笑った。

「いや、本当にかわいらしいと思うよ。」

あの子とはどういう関係なの？」

「んー、まあそれもいろいろ説明すると長くなる」

「君が言う、そっちの世界の話？」

「そういうこと。」

とりあえずあんたの話を全部聞いて、必要なことがあればこっちからちゃんと話すよ。

大概にしてこっちの世界のことは筆法陣だとか、あんたらの常識

じゃ意味わからんことばっかりだから、あれもこれも聞いてたら、頭おかしくなると思うよ」

そう言われて確かにその通りだと思った。

自分の話を始めてからだいぶ冷静にはなっただけど、思い返せば目の前にあるこのカップはつい何分か前までは粉々に割れていたのだ。それが今では普通にお茶を飲めるカップに、つまり元通りになっている。

俺が住んでいた世界ではありえないことが普通に起こる世界の話をどんどん放り込まれてはこちらの頭がもたない。

「おマタセしまシタ！

これ、ワタシのでづくりデスヨ」

女の子がおいしそうなクッキーを持って現れた。

「へー、結構料理得意なんだね」

「ドジだけど、家事全般は得意なんだよ。」

さ、誰かさんのお腹はこれで満たされるだろうから、話を戻しますか」

彼女はニヤニヤしながら、女の子を見た。

「おきやくサマ、ツツキをどうゾ！」と女の子も彼女に続いて、恥ずかしそうに言った。

俺は二人にそう言われ、クッキーをつまみながら話を始めた。

インターホン事件（勝手に命名）が落ち着きを見せて一週間ほどたった頃、突然大家さんから話があると呼び出された。

電話越しの声で、話の内容があまりいいものではないことはすぐにわかった。

まあ大家さんの俺に対する評価は、最初からこの見た目のせいであまりいいものではなかったから、態度が冷たかったのはしょうがないとあきらめてもいたけれど。

「夜中に眠れないくらい大きな物音を毎晩たてられて困っている、との苦情が入ったのですが、お心当たりはありますか？」

大家さんからの話は正直俺にはまったく心当たりのないものだった。うるさいと言われるのならインターホンのことくらいだと思っていた。

大家さんの話ではガタガタという音だったり、壁を叩くような音だったり、とにかく夜中に目が覚めてしまうほどの音らしい。

「申し訳ないんですけど、そんな音を出すようなことをしたりしてません。」

そりゃ、仕事で多少遅い時間に帰ってくることもあるので、それが気になるということでしたら謝りますが、自ら不快になるような音を出したりはしてませんよ」

俺は正直に答えたが、大家さんは認めないのは想定範囲内だったようだ。

大家さんはそれを聞いて淡々と話を続けた。

「わかりました。」

一応苦情を訴えた人にはそのように説明しておきます。

今回のことは私も実際に確認したことではありませんので、注意をした、ということと解決したとさせてもらいます。

ですが、今後また同じような苦情が出た場合にはそれなりの対応をさせていただきますので、そのおつもりで」

言うだけ言って、大家さんはその場から立ち去った。

俺は呆然とそこに残された。

眠れないくらいの物音なら、夜中だから音が響きやすいとはいえ相当の音量だ。

音の説明を聞いた限りでは、生活音とはまったく違う音のようだし、もちろん俺自身だって夜中は爆睡している。音を出すようなことが

あるわけない。

「んー、寝相が悪くて何か蹴っ飛ばしたりしてんのかなぁ・・・」
大家さんにああ言われたものの、どうしたらいいのかさっぱりわからず、途方に暮れていた。

大家さんからのクレームが入った次の日、今度は職場でひと騒ぎがあった。

閉店後に売上金を確認してみると、3万円足りないのだという。

お金を扱っている商売ではどうしても売上金額に不足金、もしくは過剰金が出ることもある。

でも違っていても数百円、大きい時でも何千円だ。

さすがに3万円は額が大きすぎる。

正直ここまでの金額がなくなつたとなると、疑いたくはないけれど誰かが盗つたのではないかという考えが出てきてしまう。

どんなに真面目な人でも、それがどんなに罪が重いことか、きちんと理解している人でも、目の前に大量の札束があれば、ついそういうことをしてしまう人もいる。

「んー、とりあえず俺がもう一回確認してみるよ。

もしかしたらどこかにまぎれてるかもしれないしね！」

まぎれてる可能性なんてないに等しいと心では思っていたけれど、従業員のみんなを不安にさせるようなこともしたくなかったから、あえて明るく言って、その日は退勤してもらった。

「さて、どうしたもんか・・・」

こういうのは責任のある立場になると、どうしても避けられない問題でもある。

うやむやにするのはよくない。

かといって明らかに犯人探しのようなことを始めれば、みんなに不

信感を与えてしまう。

もちろんそんなことしたくない。

とりあえずレジ周りをくまなく探したけれど、やっぱり見つからなかった。

他にあるとすれば、金庫の中だ。

金庫の中には今日の売上金を入れる袋と、明日の営業で使うためのお金を入れる袋が入っている。

朝、営業用の袋からレジへお金を移動させて、営業中に警備会社の人が前日の売上を取りにくる。

つまり、閉店後はその袋にはお金が一切入っていない状態でなければおかしい。

そして今日の朝は俺が営業用の袋からお金を取り出したのだ。

その時には万札は入っていなかった。

たとえ入っていたとしても、そういう時はだいたい5千円札か千円札が足りない時で、両替は忙しい時間帯に入る前に近くの銀行で済ませてしまう。

可能性が低いとしても、あるかもしれない場所はすべて確認してみなければと思い、俺は金庫をあけた。

すると金庫の中に違和感を覚えた。

誰かが袋に触ったような跡がある。

もちろん警備会社の人が入上金を取りに来ているのだから、朝とは違った状態になっている。

『売上金の入っていた袋』が問題なんじゃない。

『営業用の袋』のほうが問題なんだ。

俺はいつも営業用の袋からお金を出した後は、四つに畳んで金庫にしまう。

なのに今はきれいに広がっている。

そして袋の口がこちらを向いていて、明らかに誰かが何かをそこに入れたような痕跡がある。

俺は中を確認する前からそこに何かがあるのかわかってしまった。だってそれしかないじゃないか。

袋を金庫から取り出し、中に入っているものを取り出すと、そこにはきつちり3万円入っていた。

足りないお金は見つかった。

だからといって問題解決、というわけにはいかない。

問題は『なぜここに売上金である3万円が入っていたのか』だ。

今日出勤していた人の中で、金庫を開けられる人間は俺しかない。だから俺がそんなことをしない限り、絶対あり得ないことだ。

そして今日一日の中で金庫を開けたのは、朝と今だけだ。

警備会社の人も金庫を開けられるけれど、今日の売上金をレジから取って、金庫に入れるなんて不可能だ。

第一そんなことする意味がわからない。

少しの間必死で頭を回転させたけど、答えは見つからなかった。

けど、これで従業員みんなを安心させることができる。

なんでそんなところに入っていたのかと聞かれたなら、俺が朝寝ぼけていて出し忘れた、とか適当なことを言って、みんなに謝ればいい。

正直、従業員の誰かを疑う必要がなくなったことに俺は安堵の気持ちでいっぱいだった。

責任ある立場の人間の仕事は何があっても従業員を守ることだ。

俺も雑貨の仕事を始めて一年くらい経った頃に、お客様とぶつかった、別のお店で買っていたお客様の商品を割ってしまったことがあった。

当時の店長はその時、俺を責めずにひたすらお客様に謝ってくれた。

そして当時の店長は俺にこう言った。

「確かにお前のしたことはよくない。

だけど、何かあった時に責任とるのが上司の仕事だ。

そのためにお給料だってみんなより多くもらってるんだよ。

だからお前はもう二度と同じミスをしないようにすればいい。

今回のことを差し引いたって、お前の頑張りの貯金はまだたっぷりある。

こんくらいで見捨てるわけないだろ？」

俺は今でもその言葉を忘れない。

そう言われて当時は、もっとここの仕事頑張りたいって思ったし、今はそういうふうに部下を守る人間でありたいなと思う。

その言葉の影響もあり、この時の俺は自分の身を守ることより、自分以外を守ること必死になっていた。

もしかしたらそういう自分に少し酔っていたのかもしれないとも思う。

だからこういう事態が起きてもなお、俺は前向きだったんだ。

「ふう、最近あんまいいいことないけど、これを持ち切ればきつとまた平凡な毎日がやってくるかなー」

そんな淡い期待を胸に、その日は店をあとにした。

俺の悩み(2)(後書き)

2011.9.5手直ししました

俺の悩み(3)

そんな淡い期待はもろくも崩れ去ることになる。

「3万円失踪事件」(またも勝手に命名)は俺がやらかしてしまった、ということでは従業員のみんなもホッとしたようだった。

「もー、店長、しっかりしてくださいよ」

「ほんと焦った！」

犯人探しとかされちゃうのかと思ったもん!!」

「マジでごめんなあ。」

これからほんとに気をつけるから！」

こういうことがあって、逆に従業員のみんなと距離が近づけた気がした。

ゆっくり話すこともできないし、どんなに見た目がチャラくたって、向こうからしてみれば店長という名の上司なわけで、なかなか突っ込んだことは言いにくいものだ。

それから数週間の間は穏やかな日々が続いた。

でもそう思っていたのはどうやら俺だけだったらしい。

またも、大家さんから呼び出しをくらったのだ。

「なぜ、またこうして直接お話をさせていただいているか、おわかりになりますか？」

正直言ったらわからなかったけど、前回のことを踏まえたら一つしか思い当たらなかった。

「えっと、物音がうるさい件・・・ですか？」

「おわかりになっているということは自覚があるか？」

「いえ！そういうことじゃなくて！」

なんだか嫌な流れだ・・・。

「前は前にも言った通り、私は実際にその音を確認していませんでしたので、注意だけで済ませました。

ですが、今回は二回目ということもあり、苦情のあったお部屋で本当に音がするのかを確かめさせていただきました」

「ちようど寝付いた頃くらいから、大きな物音がして目が覚めました。

音のする方にあるのはあなたの部屋でした。

一体夜中に何をなさっているんですか？」

絶対信じてはもらえないのも承知で、「その時間は寝てます」って答えた。

だってそれしか答えようがない。

大家さんから聞かされた具体的な時刻には本当に寝入っていたんだから。

「正直にお話させていただきますが、あなたのお部屋に隣接している部屋の住人すべてから苦情がきています。

そして私自身もこの耳で聞きました。

ここまでのことがあって、寝てますと言われても、はいそうですかと信じることはできません」

ここで言い返すことだってできたけど、たぶん言い返したところで話は何一つ変わらなかっただろう。

むしろ大家さんの機嫌をさらに損ねるだけだ。

だから俺は黙って大家さんの話を聞いていた。

「このままの状態が続くのであれば、あなたを訴えたとおっしゃっている方もいます。

私としても自分の管理しているアパート内で裁判沙汰なんてごめんです。

あなたもそうでしょう？」

そんなの当たり前だ。

何もしてないのに訴えられる？

そんな話あってたまるかよ。

さすがにちょっと口に出そうになったけど、ぐっと我慢した。

「ですから、提案です。」

私が強制退去を命じることもこの場合可能かもしれませんが、それをしてしまうとお互い嫌な気持ちが残ってしまう。

ここは一つ、あなたの意思で退去してはいただけませんか？」

ここまで言われて、俺は反抗する気持ちが完全に失せていた。

「こんなことになって、あなたもあの部屋では生活しにくいでしょう？」

それに訴えるとおっしゃっている方は一週間以内に出て行っしてほしい。

それができないなら本気で考えとも言っていました。

私としては強くは言えませんが、出来る限りその条件をのんだけただければと思っています。

こんな状況ですし、一度実家に帰って、ゆっくり新しい部屋を探してみてはいかがですか？」

怒濤のように大家さんにまくしたてられて、俺にはもう選択肢は一つしかなくなっていた。

たぶん、大家さんも俺を部屋から退去させないと訴える、とでも言われたんだろう。

しかも俺に対しても言葉をわきまえないと、下手したら俺から訴えられる、と思っているのかもしれない。

大家さんもうかわいそうな人だ。

「・・・わかりました。」

一週間以内に出ていけるように、どうにかします。
いろいろご迷惑かけてすみませんでした」

俺がそう言つと、大家さんは明らかにホツとしたようだった。
「ではその旨を苦情のあつた方々にお伝えしようと思います。
かまいませんね？」

後日手続きの書面のほうを送らせていただきますので。

では失礼します」

大家さんは捨て台詞のようにその言葉を吐き捨てて帰って行つた。
俺は前回と同じように呆然とそこに残された。

なんだか頭がクラクラする。

自分の知らないところで一体何が起こっているんだろう？

さすがの前向きな俺でもここまでわけのわからないことが続けば、
気持ちの切り替えもうまくできない。

ただはつきりとしていることは一つだけ。

俺はあの部屋を一週間以内に出て行かなければいけない。

「出て行くつてどこにだよ・・・」

大家さんは一度実家に帰れ、なんて簡単に言ってくれたけど、正直
実家には帰れない。

前にも話したけど、父親との仲は別に悪くない。

だからそれが理由ではない。

父親には新しい家族がある。

これもよくある話だ。

一人暮らしを始めて、仕事も順調にこなし、俺も一応なりに一人
前になったわけだ。

父親の肩の荷がおりたつていうのもあつたろうし、父親の人生だつ
てまだまだ先は長い。

第二の人生を歩み始めたつて何の問題もない。

ただ、父親の新しい相手を母親として接するには俺自身がだいぶ大
人になってしまつていたし、二人の間に子供ができたとなると、俺

の存在は邪魔者以外の何物でもないのは明確な事実だ。
だから極力実家には行かないようにしている。

そんなわけで俺には一週間先に自分がどこで何しているのか、まったく想像できないでいた。

それでも片づけを始めなきゃな・・・なんて前向きに考えてしまうあたりが怖い、と自分で自分に飽きれてしまった。

とりあえずその日は夕方から出勤だったので、一度この話は置いておいて、仕事の準備をするために家に帰った。

そして大家さんからの宣告を受けた次の日、俺の人生にとって致命的ともいえる事件が起こる。

その日も俺は夕方から出勤だった。

いつも通り営業していた。なんら変わらない日常だった。
なのに、たった一本の電話がすべてを変えた。

「お電話ありがとうございます！」

・・・はい、はい、えっ？少々お待ちください」

バイトの子が俺を呼んだ。

「警備会社の人からです。」

なんか今日の売上金について話があるから、店長に変わってほしいって」

胸騒ぎってこういうことを言うんだな。

それだけ聞いて、俺は電話に出るのをすぐためらった。

だいたい警備会社から電話がかかってくるなんて、いい話なのじゃない。

だからといって電話に出ないわけにもいかない。

俺は覚悟を決めて電話に出た。

軽い挨拶が入り、いきなり本題を告げられた。

「あのですね、今日集金した売上金が、そちらから入力されていた金額と合わないんですよ。

しかもですね、その金額があまりにも高額だったので、そちらでいろいろとご確認いただきたいと思いましてお電話させてもらいました」

もうこれはミスとかのレベルではない。

確実にそこからお金を盗っている。

とりあえず警備会社の人からの電話を切った。

すぐに金庫を確認しに行ったけど、中には袋が二つあるだけで他には何もなかった。

閉店までは残り1時間を過ぎていたし、お客様ももういなかったの
で、今日は早めに店を閉めた。

従業員のみんなはただならぬその雰囲気、俺が話し始めるのを待
っていた。

「実は昨日の売上金が5万足りなかったと警備会社から連絡が入
った。

さすがにここまでの金額がないとなると、どうしてもはつきりさ
せなければならぬことが出てくる。

俺としてもみんなを疑いたくはない。

みんなが犯人ではないと信じているからこそ協力してほしいんだ」
ここまでの事態だ。

嫌です、なんて言える人は一人もいなかった。

昨日は俺とバイトの男の子二人でレジを閉めた。

その時はきちんとお金はあったし、彼がお金を抜く様子は見受けら
れなかった。

つまり可能性としては朝から警備会社の人が集金に来るまでの間に

5万円が抜かれたことになる。

そうするとまず疑われてしまうのは朝、金庫を開けた人間だ。

それは最近異動してきた社員の男の子だった。

「俺、盗んでなんかいません!!」

自分が周りから疑われてることに気付き、必死で訴える彼を制し、俺は言った。

「特定の誰かを疑うことはしない。

とりあえず従業員全員のロッカーをみんなで確認したいと思う。

それから出勤している人の荷物もできれば確認させてほしい。

どうかな？」

もちろん拒否なんてできる雰囲気ではなかったので、みんな素直に従った。

そこにいる人達全員で確認していった。

そこから5万円が見つかることはなかった。

「協力ありがとう。

助かりました」

そうみんなにお礼を言うと、社員の男の子が俺にかみつくように言った。

「ってか店長の机の中とか、荷物は確認しないんですか？

俺達だけ疑われて気分悪いです。

店長だから確認しないと不公平だと思います」

彼の言うことはもつともだ。

しかも真っ先に疑われたのだから、他の人よりそういう気持ちが強くて当然だ。

「確かにそうだね。

じゃあみんなで確認してもらってもいいかな？」

俺にはロッカーはない。

その代わりに店長室がある。

そこも鍵がかかっていて、店長室は俺以外では絶対に開けられない。もちろん俺は自らを陥れるようなバカな真似なんてしない。

でも逆にここで見つかったとしたら俺は言い逃れのしようがないのだが。

まずは俺の荷物を確認し始めた。

確かに疑いの目で荷物の中身を見られるのは気分のいいものではない。

「荷物の中は入ってないな。」

「じゃあ次は机の中を見させてもらいます」

机の中も基本的には書類しか入っていない。

みんなが丁寧に一枚ずつ間を確認していったけれどそこにもなかった。

「じゃあ最後にここ開けてもらえますか？」

社員の彼が言った場所は机の中で鍵のかけられる一番上の引き出しだ。

俺は彼に鍵を渡した。

その時俺は、ここで万が一5万円出てきたら俺の人生終わったな、なんて不謹慎なことを考えていた。

「あつ！！！」

「これ・・・」

「マジかよ・・・」

突然みんなの声が重なり、視線が俺に集中した。

俺はそのバカげた考えにふけていたので一瞬なんのことだかわからなかった。

そしてそんな俺に社員の彼が睨みながら言った。

「これはどういうことなのか、説明してもらえますか？」
そう言った彼の手の中にはきっちり5万円がにぎられていた。

俺は頭が真っ白になった。

こういう時、人はほんとに何も考えられなくなる。

少しでも自分に非があると自覚している場合のほうで、ごまかしたり否定したりしようとするのかもしれない。

「何も言わないってことは、店長がやったってことなんですか？」
そう言われて我に返った。

「違う！」

俺じゃない！！」

「だったらなんでここから出てくるんです？」

いつもここに5万円いれてるとでも言うんですか？

それとも誰かがここに5万円入れたとでも？

店長しか開けられないこの部屋で？」

彼の言うことは正論だ。

鍵のかかっている店長室の鍵のかかった机の中から出てきたんだ。
他の誰かがやったなんて不可能だ。

「・・・いや、ここには俺しか出入りできない」

「じゃあ、やっぱりこの5万円を盗んだのは店長ってことですよ
ね？」

「・・・本当に違うんだ。」

俺は何もしてない」

「こんなにちゃんとした証拠があるのにまだしらを切るって
いうんですか？」

ってかよくよく考えれば店長だって昨日金庫にお金をしま
ってるんだから、盗むタイミングちゃんとあったんじゃない
ですか？

それなのに真っ先に俺らを疑うなんてひどすぎやしません
か？

ばれないとも思っ たんですか？」

彼に続いて周りの子達も発言し始めた。

「そういえばこの前3万円足りなかった時も店長が一人でお金見つけたんだよね？」

あれって盗もうとしてばれたから、見つかったってことにしたんじゃない？」

「マジ最悪。」

ここで店長がやったってわかってなかったら、今度はうちの財布のお金とか盗られてたかもよ」

責められて、俺はもう何も言えなくなっていた。

周りにいたバイトの子達が軽蔑した目で俺を見ている。

だから俺はすぐに悟った。

もう俺の居場所はどこにはない、と。

俺はたったの二日間で済む場所と働く場所の二つを失ったんだ。

俺の悩み(3)(後書き)

2011.9.4手直ししました

悪い偶然（前書き）

ここから彼の身に何が起こったのか、少しずつ判明していきます。

悪い偶然

「なるほどね・・・」

なんとなく状況が見えてきた」

俺の話を一通り聞いた彼女がつぶやいた。

「その後俺がどんなことになったのか聞きたければ教えるけど・・・」

「

そう言ったものの、言葉に出すのはつらいものがあつた。

思い出すだけでちよつと吐き気がする。

5万円が見つかった次の日、俺は上司から事実確認を受け、その翌日には懲戒免職という処分が決まつた。

ただ会社をくびになるより厳しい。

再就職の可能性もないに等しくなるだろう。

さすがに懲戒免職が決まつた日は何もできなかった。

ただ部屋でじつとしていた。

友達にだつて簡単に相談できる話じゃないし、親には口が裂けても言えない。

そしてその日は気付いたら眠りに落ちていた。

いろんなことが重なつて精神的に疲れていたんだと思う。

だけど、次の日目が覚めて、自分は今日を入れて後4日足らずでここを出て行かなければならないという事実を思い出した。

その原因のことを考えると、家にいること自体がいたたまれなくて、部屋を飛び出した。

そして今俺はここにいる。

「いや、そこを話すのはどんなにあんたが前向きとはいえ、しんど

いだろう？

とりあえずいろんなことが重なって追い込まれて、ふらつと家を飛び出したらここにたどり着いた。

それで間違いないか？」

「まあざっくり言えばその通りかな」

それまで自分で作ったお菓子をパクパク食べていた女の子が食べるのをやめて真剣な面持ちで言った。

「ごシュジンさま、コレはけっこうヒドイばたーンデスね」

「そうだな。」

というかほんとに性質の悪いヤツに捕まったんだろう。

こればかりは運が悪かったとしかいいようがない」

彼女は真っ直ぐ俺を見て話を続けた。

「これからあたしが話すことはあくまで仮定の話だが、おおよそ間違いないだろう。」

ここからはあたし達の世界の話が少しずつ入ってくる。

あたしにとつては当たり前のことから、さらつと話すかもしれないけど、あんたにとつては意味不明なことも多々あると思う。

なるべく自分から説明するように努力はするが、そんなときはちゃんと質問しろよ？

その都度必要な分だけ説明する。

全部話したら頭がもたなくなるからな」

「・・・わかった。」

でもその前にトイレ借りてもいい？」

かなり真面目な顔して言ったら、二人はまた顔を見合わせて笑った。
「ワタシ、おきやくサマのそういうところ、とってもスキですヨ！」

「さて、トイレで心の準備を済ませたところで、話を始めるとするか」

どうやら俺のトイレの本当の理由が彼女にはばれてしまっていたよ

うだ。

ここまで読まれてしまうとちょっとくやしい気もしてくる。

「お前はリストから該当者がいるか確認してきてくれ」

「リヨウカイしまシタ！」

そう言つて女の子は最初に飛び出してきた扉の奥へと消えた。

「まず、今のあんたは手配書に載っちまうような悪いヤツに目をつけられ、からまれている状態だ。

いつ、そいつと出会ってしまったか、あんたには思い当たることがあるだろ？」

「・・・公園の・・・中？」

「その通り。」

あんたが不快に感じた風。

それがあんたとヤツの最初の接触だ」

そうなつてくると早速一つ疑問が出てくる。

「そっちの世界の人って見えないのが普通なの？」

君が特別つてこと？」

「いや、あたしのように人と同じ姿をしていればあんたの世界の人間も見ることができる。

あんたとあたしの違いは筆法陣が書けるかどうかだけだ。

だけどちよつとでも違うもんが生えてたりすると見えなくなる」

「違うもん？」

「例えば、人の姿はしてるけど耳とかしっぽが生えてる、とか。

狼人間とかドラキュラみたいなのを想像してもらえればわかりやすいと思う。

あと根本的に人の姿じゃないヤツはあんたの世界の人間は普通見ることではない。

動物の姿をしてるけどしゃべれる、とかの場合ね。

まあ、あんたの想像している以上の人種や生き物がうじゃうじゃ

してる世界だと思ってくれ」

たった一つの質問でこんなに意味不明度が高い話になるとは思わなくて俺は苦笑いした。

「ま、今あの子が探しているリストの中に該当者がいれば見せてやれるから、どんな姿かは一回頭の隅に置いておけ」

「うん、そうする」

「たぶんヤツは、筆術師ひつじゆつしが解除し忘れた開世かいせの扉を使ってあんたの世界に来たんだろう。

筆術師ってのはあたしみたいに筆法陣を扱える人のこと。

あと開世の扉つつうのはあんたとあたしの世界をつなぐ扉のこと。ここまではオッケー？」

「な、なんとか」

「で、その扉も筆法陣と同じようにこの万年筆で描くんだけど、解除しないと数分間その場所に残っちまう。

そうするとそれを使ってあんたの世界に悪さをしに行くヤツがたまーにいるんだ。

で、数分すると扉は勝手に消えちまう。

ヤツは元の世界には戻れなくなり、あんたの世界にとどまり続ける。

その結果、あんたはあんたの人生をめちゃくちゃにされるほどの迷惑を被ることになった」

ふとまた疑問が浮かんだ。

「扉が数分そこに残るって言うけど、結構危なっかしいんだね。出入りするところとか見られちゃうじゃん」

「残念ながらそれはない。

普通、開世の扉を解除するまではその扉の使用者はあんたの世界の人間には見えない。

その扉の力自体があんたの世界に存在しないものだから、その力

を行使している間は見えないってこと。

だから開世の扉自体も絶対に見られることはない。

筆法陣もね。

ただし例外がある」

「例外？」

「あたし達の世界の力に強く反応しちまう人間がたまにいるんだよ。あんたの世界にだって幽霊を見ちゃうとか、引き寄せちゃうような人間いるだろ？」

それと一緒に本人の意思とは無関係に見えちゃったりするわけ」

「じゃあ俺が見たトイレの奥の光は、普通は見えないものだったってこと？」

「その通り。」

さすがにここまできたら、少しは物分かりがよくなってきたな。たぶん開世の扉の力にあんたが引き寄せられたんだろう。

いつもだっただけ通るはずのない所を通るって感覚がその可能性を裏付けている。

そしてその扉を通ってきたヤツに目をつけられた」

「まさか俺にそんな能力があるとは・・・」

「しかもあんたはどうやらあたし達の世界の力が普通の人間よりも何倍も強い。」

開世の扉に近づいたことで潜在的に眠ってた力が引き出されて強くなったのかもしれない」

俺は今まで平凡な人間だと思って生きてきた。

だから突然普通の人間にはない力があると言われても全然ピンとこなかった。

「あたし達の世界の力を持つてる人間自体は珍しいことじゃない。普段は見えないけど、疲れたり弱ってたりすると見えやすくなったりするらしい。」

ほら、妖精を見たって言う人いるだろ？

あれなんかはたぶんあたし達の世界の住人が見えてるんだ。
ちっさいおじさんとかこっちには普通にいるしな」

「ああ、確かにその類は幽霊とは違うもんね」

「逆に、筆術師以外の住人はあんたの世界に来たとしても、その能力を発揮できない。」

だから来ても大概があてもなくフラフラしてるだけか、見えるヤツのそばをウロウロして、そいつの反応を見て楽しむとか、そんないたずら程度のことしかできない。

自ら何か行動を起こすこと自体不可能なんだ」

「え？そしたら俺の今の状況の説明がつかなくなるよね？」

「残念ながらこれにも例外が存在する。」

あたし達の世界の力を持つ者、しかもその力が強ければ強い者のそばにいと、それに作用されて筆術師以外の住人も能力が使えるようになる」

ここまで言われてなんとなく話の流れが見えてきた。

「つまり、俺のそばにいれば君の世界の住人もやりたい放題できる。」

そういうこと？」

「ご名答」

彼女はちよつとかわいそうな眼差しで俺を見ていた。

「あんたが公園の中を通ったことが偶然だったんじゃないって、あの公園に開世の扉が解除されずに残ってしまっていたことが偶然だった。」

そしてそこからヤツが出てきた。

それも偶然だ。

悪い偶然が重なって、あんたは今の状況に陥っている」

「ってことは俺、なんも悪くないんじゃないん……」

さすがにちよつとせつなくなってきた。

ようするに開世の扉を描き、解除するのを忘れた人がすべての元凶

ということだ。

「そうだ。」

あんたはなんも悪くない。

その扉を解除するのを忘れた筆術師は調べればすぐわかる。

扉の解除忘れは違反だし、そのせいであんたにとてつもない迷惑がかかっている。

通常の解除忘れの罪より、かなり重い罪になるだろうな。

解除忘れの犯人は後で必ず見つけて、処罰させるから安心しろ」

「調べてわかるものなの？」

「開世の扉は筆術師でもきちんと免許を取ったヤツしか使えない。

違う世界をつなぐんだ。

そんなに誰彼かまわず描けるもんじゃない。

一応上級の筆法陣だしな。

で、開世の扉を開くとあたし達の世界で記録に残る。

どういう仕組みかまで話すとまたややこしくなるから省くけど、そんなにしょっちゅう扉を開く場所が一緒になることはないから、だいたいの日付と場所さえわかれば、誰がその扉を描いたのかすぐわかる」

「免許っていうけど、こっちの運転免許みたいなもの？」

「ああ、それが一番近いと思う。

免許取る為に講義受けるし、試験も受ける。

更新の時はまた試験受けなきゃなんないのがめんどくさいけどね。ちなみに扉の解除忘れは運転免許という無免許運転くらいの罪になる。

だが特に問題が起きずに扉が消えてしまえば罰せられることはない。

残念ながら記録には扉を描いた記録は残っても、解除したかどうかの記録は残らないんだ。

無免許だつてばれなきゃ罰せられないだろ？」

「確かに」

「だが、無免許の状態で事故でも起こしてみる。
罪は当然重くなる。」

今回のあんたのケースはまさにそれに当たる」

「なるほどねえ」

「最近が開世の扉を描く筆術師の意識がゆるくなつてて情けないよ。
違う世界同士をつなぐことがどれだけ危険なことか・・・

あたしが悪いわけじゃないけど、本当に申し訳ない」

そう言つて頭をさげた彼女は本当に怒りと憤りを感じているようだった。

俺はそんな彼女を見て、さっきまで扉を解除し忘れた筆術師のことを憎いとまで思っていたけれど、少しだけ気分が晴れた。

自分以外の人間が自分よりも深く考え、親身になつてくれていると思うと救われる気がするものだ。

こういうふうに向き合ってくれる人は好きだなあなんて、頭をさげてくれている人に対して、ちょっとだけ不謹慎なことを考えたのは秘密にしておこうと思った。

悪い偶然（後書き）

2011.9.4手直ししました

幽霊とは違う存在

「頭あげてよ。」

君が悪いわけじゃないんだしさ」

ここまでいるんな非現実的な話が出てきていたけど、彼女の言うことを否定する気は一切なかった。

彼女の話はきちんと筋は通っていたし、なにより一つ思い当たることもあった。

俺は幽霊の存在を一切信じない。

その一番の理由は幽霊を見たことがないからだ。

だけど、妖精とかの類はもしかしたらいるのかもしれないって気持ちはずっとあった。

それらしきものを何度か目撃しているからだ。

それは時にとても美しいものだったり、ちっさいおじさんみただったり、さまざまな姿だった。

疲れている時に必ずではないけれど見るが多かったので、目の錯覚だとも思っていたが、今の話を聞くとどうやらそれはこっちにまぎれこんでしまったあちらの世界の住人が見えていたということだろう。

「でも一番罪が重いのは、あんたの力の影響を受けて嫌がらせをしてるヤツだ」

頭をあげた彼女が今度は怒りをあらわにして言った。

「最初のヤツの嫌がらせは目覚まし。」

それからインターホン。

さつきも軽く話したが、本来であれば筆術師以外の住人は能力を発揮する以前にあんたの世界の物体を触ることはできてても動かすことはできない。

扉すら開けることはできない。

部屋に入るのだって誰かが開けた隙を狙わなきゃならない」

「意外と不便だね。」

でも俺のそばだと話が変わってくる」

「そういうこと。」

力の影響を受けて物体に触れるようになったヤツは、鳴るはずだった目覚ましを止め、インターホンを押した。

最初のうちはあんたをちょっと困らせてやるうってくらいのことだったと思う。

その困った反応を見て楽しもう、くらいのね」

そう言われて、ふと俺は自分自身がどう対応したかを思い出していた。

その二つの嫌がらせに対して、俺は完全に無視するという姿勢を取った。

無視するというより気にしない、というほうが正しいかもしれないけど。

「だが、あんたはその行為に対してまったく動じなかった。

少しも困った様子を見せなかった。

それがたぶん逆にヤツの癢に障ったんだろう。

そういうタイプだったんだ。

あんたとヤツの相性が悪すぎたんだろうな・・・」

「確かに気は合わなそうだよ・・・」

「そうしてヤツはもっとひどいことをして、あんたを困らせてやろうと考えた。」

もしかしたら自分の存在をバカにされたくらいの考えまで持っていたかもしれない。

目覚ましとインターホンの嫌がらせから一週間何もない期間があったと言っていたが、その間にヤツは次の行動に移った。

それが隣接する部屋からの苦情だ」

そう、ここらへんから俺の手に負えなそうな物事がたくさん起き始めたんだ。

「ヤツはあんたのそばにいてことで力の影響を受け、さらに能力を発揮していったんだと思う。」

最初のうちは部屋への出入りもあんたが帰ったタイミングでしていたはずだ。

鍵のかかった部屋には入れないし、かかってなかったとしても勝手に扉が開くのは変だからな。

そういう変なことは起きなかったろ？」

「うん、扉が勝手に開いたりすることはなかった。」

でもさ、突然勝手に扉が開いたりするほうがびっくりするし、恐怖心煽られるけどなあ」

「もしかしたらそういう怪奇現象みたいなことをするのはプライドが許さなかったのかもしれない。」

こっちの住人はそういうふうに扱われるのをひどく嫌うヤツもいる。

自分は幽霊みたいな不確かな存在ではない、ってな。

だから嫌がらせの内容がひどく現実的なんだよ」

「目覚ましが鳴らないのは壊れたから。」

インターホンが鳴るのはピンポンダッシュしてる人がいるから。

どっちも怪奇現象と結び付けるより、そう考えた方がしっくりくるね」

「その二つもそうだし、物音の苦情もそうだ。」

ただ不思議な物音がしたりするだけならポルターガイストみたいになっちまう。

それを自分と同じ人間がやっていると思わせて、その現象の犯人が誰なのかを明確にする。

結果犯人扱いされた人間は勝手に罪を着せられる。

より現実的な方法で、より確実に対象者を苦しめることができる」

なんとまあ、俺は性質の悪いヤツに目をつけられてしまったんだか。今まで特に運が悪いなと思うことのなかった、平凡でも幸せな人生を送ってきたツケでも回ってきたんだろうか。

「それを可能にする能力がヤツには備わっている。

それがなければ今回のことははつきり言って実現不可能だったはずだ」

「それは・・・？」

「ヤツの手には永久筆法陣が描かれている可能性が高い」

「えいきゅうひつほうじん??？」

「名前の通り永久に残る筆法陣だ。

普通の筆法陣はその能力を発揮すると消える。

さつきカッブ直した時もそうだったろ？」

「ああ！確かに！」

俺は一時間ばかり前に起こった出来事を思い返して、ちょっと興奮しながら答えた。

「だけどある条件が満たされれば、筆術師以外の住人も筆法陣を一つ持つことができる。

条件は知る必要がないから説明しないけど、それを持つことができる住人は基本的にあたし達の世界では周りから優秀だと思われる」

「えっ！？優秀って・・・

やってること極悪だけど」

「頭がよけりや本当の性格がどんなでもとりあえず大半が優秀って評価されるだろ？」

あんたの世界でだって、殺人事件の犯人の知り合いとかが、こんなことするような人だと思いませんかーってよくテレビで言ってるじゃん」

彼女の言う通りだ。

今の世の中、真面目そうに見えたって実際は何を思い、何をしてるのかなんてわからない。

人の本質というのは見た目の裏に隠れてなかなか出てこようとはしないものだから。

それよりも彼女が俺の世界のニユースとかを見ているという事実のほうに興味をそそられたけど、話の腰を折る雰囲気じゃなかったから聞くのは我慢した。

「この場合、優秀っていうよりずる賢いのほうが正確な表現な気もするけどな。

だからあたし達の世界ではどちらかと言えば悪いこととは無縁の存在だったはずだ。

持っている能力もむこうではもつと人の役に立つようなことに使っていたかもしれない」

「で、その能力ってどんな能力なの？」

「その永久筆法陣を使えば、どんな場所でも通過できるし、金庫の中身だって抜くことも可能になる。

たぶん描かれているのは貫通の能力を持った陣だろう」

そう言っただけで彼女は先ほどカップを直した万年筆を胸ポケットから取り出し、また机の上に何かを描き始めた。

その筆法陣はカップを直した筆法陣よりももっとシンプルなものだった。

描き終わるとさっきのように万年筆の先で筆法陣を軽く突いた。

ゆっくりと机に向かって筆法陣が落ちていき、机にたどり着くと筆法陣と同じだけの大きさの穴が開いた。

「うお!？」

「頭でわかってても実際に見るのはまだ慣れないみたいだな。

これが物体を貫通させることができる陣だ。

生きているものには使えない。

人間はもちろんだし、動物も植物もな。

普通はほつとくと数秒で元に戻る」

そう彼女が話している間に穴はどんどん小さくなり、机は元通りになった。

「永久筆法陣だと、所有者の意思で貫通させた部分を開けっぱなしにしたり、元通りにしたりできる。

もちろん普通の人間には見えない。

だけどそこが開いていることは事実だから、触ったりすると普通の人間でも抜けちまう。

だから基本的に開けっぱなしにすることはないし、開けてあると
いうこと自体を忘れても貫通させたところの穴は消える。

永久筆法陣は所有者との意識でつながってるものなんだ。

あと永久のほうは貫通させられる場所は一か所だけだから、同時に何か所も貫通させておくことは不可能。

筆術師が描く分にはいくつもできるけど、穴を維持させるには万年筆でその穴に触れ続けなければならないうってゆう制約がある。

何事もメリットデメリットがあるってことだ」

「べ、勉強になります」

そうは言ったけど、この話が俺の人生において先々役に立つのかは未知数だった。

幽霊とは違う存在（後書き）

2011.9.4手直ししました

似てるけど別物の容疑者

「この能力を使って、ヤツは隣接する部屋に入り込み、その部屋の住人とあんたが寝入ったところを狙って物音を鳴らした。」

鳴らし方はあくまであたしの想像だが、あんたがいる部屋のほうの壁の近くに置いてあるものをガタガタ揺らしたりしたんだと思う」「自分の部屋の物が動いた音が、なんで俺の部屋からの音ってことになるわけ??」

「いいか、部屋の住人は寝てるんだぞ？」

寝てる時に音がして、それが何の音でどこから鳴っているのかすぐに理解できるか?」

「うーん、さすがにそれは無理かも・・・」

「とりあえず音がして目が覚めたら、その音がした方向に意識を集中させるだろ？」

部屋の住人が起きるまで、その方法で音を出す。

最初のうちは何度かその住人の目を覚まさせることを徹底していただろう。

眠りを妨害されるっていう行為はストレスを与えやすいしな」

ここまで話を聞いたら、逆にその物音を聞いてなぜ俺の方こそ目が覚めなかったのかという疑問が出てきそうなものだが、その答えははつきりしていた。

俺は基本的に目覚ましが鳴るまで、たとえ近くで風船が割れようと目覚めることはない。

だからインターホンが鳴り続けたって俺にはなんの問題なかったわけだ。

相手がずる賢いヤツなら、インターホンの件もあって俺がちょっとした音じゃ起きないのもわかっての犯行だったんだろ?

そう考えると何も知らずにのんきに寝ていた自分がちよっと嫌にな

る。

「そういうことが何回か続けば、眠りを妨害された人間が次に起こす行動は大抵決まってる。

音が鳴るほうに近づいてみるんだ。

そして壁に近づいてきたことを確認すると、ヤツは永久筆法陣を使って、あなたの部屋へ移動し、壁を叩いた。

ここまでできたらそんなに強く叩かなくても、むこうに音が伝わる程度で十分な効果がある」

「たった一回でも俺が物音の犯人だと思いこませればよかったってことか・・・」

「そうだ。

人間ってのはたった一回でも悪いイメージがついちまうと、そのイメージが変わることはそうない。

そうなたらちょっとしたことでも、悪いほう悪いほうへ話が進んでいく。

ただでさえあなたは見た目の印象が悪い方向へ取られやすいからな」

こういう時、見た目の印象というのは本当に厄介だなと思う。

俺自身近所付き合いは割と好きなタイプだけど、引っ越してきて三カ月くらいしか経ってないし、そのうえ毎日早く出勤して遅くまで仕事という生活だったから、ご近所さんと関わるきっかけもなかなか見つからなかった。

それが余計に裏目に出てしまったということだ。

「ヤツは毎晩それを続けて、隣接する住人にストレスを与え続けていったんだろう。」

一週間近くそんな行為をされれば、そりゃ大家さんに苦情を申し立てるさ。

しかも寝れないストレスから、実際の物音よりもオーバーに説明している可能性が高い。

「ポリウムが1しか出てないものでも10出ているかのようにね」

「負のスパイラル状態・・・」

「そしてヤツは隣接する住人の嫌がらせをしている間に次の嫌がらせを考え付いたんだろう。」

それが職場での金銭が消える事件だ。

さっきも言ったが、ヤツの所有する永久筆法陣を使えば金庫の中はもちろんレジの中のお金だって抜くことができる」

「でもさ、レジの中を触ったりできたとして、お金はこつちの世界に存在するものだから消えたりしないよね？」

「そのまま手に握ってたりすれば、お札が宙に浮いた状態で見えちゃうけど、もしヤツが服を着てる、もしくは布をまとっていれば、その内側に隠せば見えなくなる」

「つまりレジに人がいないタイミングさえ狙えば、他はたいした問題じゃないってことか」

「そういうことだ。」

ただ3万円を金庫に移した時は、ヤツが金庫の袋の意味をきちんと判断できていたかはわからない」

彼女が珍しく意味深な発言をした。

「どういうこと？」

「もちろんあたし達の世界だって店はある。」

「買い物の流れだってあなたの世界とそう変わらないさ。」

「けどお店によってお金の管理の仕方がまったく一緒ではないだろう？ レジのお金はその店の売上が入っているのは誰が考えてもわかる。そしてそのお金がただ消えただけでは、解決しない奇妙な事件で終わってしまう。」

「あんたに嫌がらせをするのが一番の目的なのに、ちょっと意味合いがそれってしまう」

「それでレジから取ったお金を金庫の中にしまったってことにしてもあの入れ方は現実的じゃない気がするけど」

「だから判断できてたかどうか分からないって言ったんだよ。

金庫の中に袋が二つある理由はわからなかったにしても、売上金を取りに来たのを見ていたとすれば、そっちに入れるのは現実的ではないと考えるだろう。

あんただけがターゲットなのに、警備会社の人を巻き込んでしまう可能性がある。

ヤツが相当プライドが高いと仮定するなら、ターゲット以外に疑いをかけるのは許せなかったとも考えられる」

「なんかほんと、俺、そいつのこと好きになれない」

「だからヤツの中でとりあえずあんたが変に思ったとしても、売上金がなぜか金庫にあった、という事実を作ろうと考えた。

それがあの結果だ。

そしてヤツはどうするのが一番ダメージを与えられるのかを考えだす。

そのためにはまずあんたの働く店の仕組みをきちんと把握しないとダメだと考えたとするなら、数週間の間、店のほうで何事もなかったことの理由に筋が通る」

ようするに3万円失踪事件は結果的にヤツにとっては相乗効果として働いたということだ。

俺が勝手に自分のミスだとみんなに言っただけだし、たとえ正直にそのことをみんなに話していたとしても、金庫を開けられる人間は俺だけだったわけだから、ちょっとお疲れなんだと思われただけだったろう。

たまにいるんだよなあ。

的狙ってないのにど真ん中打ち抜いてくれちゃうヤツ。

「3万円の件からヤツは日中あんたが働いている間は職場を観察し、寝てからは隣接する部屋の住人への嫌がらせを続けた。

「またも、知らない間にあんたを置きざりにして話は悪い方向へと進んでいたわけ。」

「職場での嫌がらせが一番最悪になるようにタイミングを伺ってたんだろ？」

「そんなときに大家さんからのあの提案という名の強制退去の話だ。ヤツは待つてましたと言わんばかりに行動に移ったんだろ？」

「そのタイミングもあんたにとっては最悪、ヤツにとっては最高のものになってしまった」

「筋が通りすぎてて、もはや逆に拒否したいんだけど」

「ザンネンながらソウはいきマセン。」

「やはりごシュジンさまのようすドオリでした」

「先ほど出て行ったドアから、女の子は俺を憐れむ目で見つめながら何かファイルのようなものを持って現れた。」

「やっぱりな。」

「つうかなんで入ってこなかったんだよ。」

「5分くらい前からドアんとかいたろ？」

「たいみんぐのモンダイです。」

「カイワのじゃまをしてはいけマセンから」

「そう言いながら、女の子はそれを机の上で広げた。」

「そこにはどこかで見たことのあるような動物が体に布をまとっていて、左の手の平をこちらに向けて、二本の足で直立している写真が貼ってあった。」

「確かこれは・・・」

「オコジヨ・・・？」

「見た目は似てるけどな。」

「二足歩行するし、しゃべるから全然別物だよ」

「こいつが俺に嫌がらせをしてる容疑者？」

「名前はピアーだそうだ。」

手の平にはさつき書いた貫通の能力を持つ筆法陣が描かれてる。
ちなみにこれがなんのリストかわかるか？」

「さっきの話でこいつが君の世界で優秀だったんなら、悪いリストではないんでしょう？」

「セイカイはこちらデス」

そう言つて女の子はそのファイルの表紙を俺に見せた。

そこには『最新版 行方不明者ファイルリスト』と書かれていた。

「これはあんたの世界でいうと六月上旬に更新されたものだ」

彼女はもう一度容疑者と思われるオコジョらしきもののページを開いた。

「そして現段階で最も重要となるのが行方不明になった日付だ。

あんたの世界の日付とは表記が異なるから、あんたが見てもさっぱりだと思っけどな」

「で、行方不明になったのは？」

「あんたの世界でいう五月十日あたりから約五日間。

つまりあんたが公園を通った時期とほぼ一致する」

仮定の話だったとはいえ、ここまで条件がそろえばたぶんこのピア
ーってヤツに間違いないんだろう。

女の子の話では俺が公園を通った時期に行方不明になったのはピア
ーだけだったそうだ。

でもどんなに疑わしいヤツでも、きちんとした証拠をつかむまでは
あくまで容疑者であつて犯人ではない。

それは彼女も重々承知しているようだった。

「今まで話したこともピアーが犯人かもしれないってことも、全部
あくまで仮定の話だ。

それでも相手がどんなヤツなのかをある程度わかっていれば策も
練れるってもんだ」

「でもさ、想像してた相手と全然違うヤツだったらどうするの？」

「は？どうもこうもしねーよ。

相手が誰だろうと捕まえるだけだし。

それがあたしの役目だしな」

「ソウです！」

ごシユジンさまはドンナあいてでもまけたりシマセン!!」

「それは頼もしい限りです・・・」

カップを直す筆法陣見る前にも女の子は『すごいヒト』って言うてたし、彼女はいつたい何者なんだ？

筆術師とやらがいるなら筆法陣を使えるだけですすごいことにはならないだろうし、開世の扉を開けられる筆術師も彼女の他にそれなりの数いるようだし、この根拠のない自信はいつたいどこからやってくるんだろうか？

「確かにあんたは春先から今に至るまでにとてつもなく運が悪かった。

だけどな、あたしのところにたどり着いたのはその中で唯一の幸運だ」

おお、ここまで言えるならいつそ^{さすが}清々しい気もしてくるな。

「だいぶ前にこれだけは言えるって言っちゃったけど、もう一個はつきり言えることがある。

ドアを開けた時点であんたの悩みは解決されたも同然だから。

だから何も心配すんな。

あんたは何も考えなくていい。

あたし達を信じてくれれば、それだけでいい」

彼女の真っ直ぐな瞳に見つめられ、彼女達の根拠のない自信の理由を考えるのをやめることにした。

言われただろ？

考えなくていい、ってさ。

だって俺ができることなんてたった一つしかないんだから。

「わかった。

信じるよ。

もう俺の人生、君に賭けるから！

ダメだった時は責任とってね！」

俺がわざとらしくニツと笑うと、彼女も応えるように笑った。

俺がこの笑顔で彼女に惚れちゃったのもここだけの秘密にしておこうと思った。

似てるけど別物の容疑者（後書き）

はい、惚れたー（笑）

でも君と俺との出会い編ではそんなに恋愛色は出てこないかもです。

冷静な女の子（前書き）

ちよっとおふざけな感じ入ります（笑）

冷静な女の子

「さて、もうこんな時間か」

彼女が腕時計を見て言った。

俺も自分の腕時計を見ると、もう十七時をまわっていた。

昼過ぎに起きて、家を飛び出して、あてもなく歩いて、ここに着いたのは十四時頃だったから、かれこれ三時間経っている。

「そんなに時間が経ってるとは思わなかったけど、疲労感は一時間以上のものがあるな」

自分の知らないことがこんなにも世の中に存在するだなんて思わなかった。

そういうことを頭に入れようとすれば、疲労の蓄積もハンパじゃない。

ほんとに久しぶりに勉強したような気分だ。

「お疲れのところ申し訳ないが、今後のスケジュールの相談だ」

「あ、そうだよな。」

俺いつたいどうしたらいい？」

「・・・あんたは今日家に帰るな」

「はい!？」

想定外のことを言われて、まぬけな声が出てしまった。

しかも相談って言ってたくせに『帰るな』って命令系なんですけど！

「俺、ダンボールを布団の代わりにして生活するのはごめんです!」
何が好きでホームレスをやらなきゃいけないんだ。

まだまだ貯金だっていっぱいあるんだぞ!!

「誰がホームレスやれ!なんて言ったよ。」

話は最後まで聞け。

それになんで家に帰るなイコールホームレスなんだよ。

ビジネスホテルでもネットカフェでもいろいろ選択肢はあるだろが」

「・・・確かに。」

完全に俺の早とちりだー」

あきれ顔の彼女の横で女の子はくすくす笑っていた。

「今日はあんたの世界には戻らない方が効果的だと思ってな。だからここに泊ってけ」

「それは全然かまわないんだけど・・・」

むしろ嬉しいですよ、と思ったが、それよりも気になることが一つ。

「ここは俺の住んでる世界とは違う場所なの・・・?」

そう尋ねながら俺は窓の近くへと歩み寄った。

窓から見える景色は見覚えのある場所だ。

そんなに多くはないけれど、人の行き交いだってある。

ここから見える景色は俺の知ってる世界とは違うということなのか？そこを歩いている人々は彼女の世界の住人ということなのか？

「あれ?」

この部屋のこと話してなかったっけ?」

彼女も窓の方へ歩み寄りながら俺に聞いた。

「ワタクシがきいてイタカぎりではおハナシしておりマセンでしたよ、ごシュジンさま」

女の子が冷静に答える。

彼女はちよつと申し訳なさそうに俺を見ながら話を続けた。

「あー、悪い。」

てつきり説明した気分になつてた」

「いいよいいよ。」

でも意外。

結構抜けてるところあるんだね」

ここに来てすぐの時も女の子に、仕事をしなくていいのか？と突っ込まれていたことを思い出した。

「・・・たまに言われる。」

直さなきゃと思っではいるんだが・・・」

「えー、別にそのまんまでいいと思うよ。」

かわいいじゃん」

「!!!!!!」

あれ？

そんなに反応するところ？

「べ、別にかわいくなんかねーよ！

おまえ、そういうこといっつも言ってんのか？」

顔は冷静を装おうとしてるけど、言葉の節々に動揺が見られる。

俺の予想が間違っていないとするならば、彼女はいわゆる『あれ』なのかもしれない。

ちよつと試すつもりでそれまでよりはるかに優しい口調で彼女に言った。

「いっつも言ってるわけじゃないよ？

本当にかわいいって思ったから言っただ。

それに君って結構しっかりしてるように見えるし、隙がない感じだから、ちよつと抜けてるくらいがちょうどいいんじゃない？」

「・・・」

うつむいてしまった。

うーん、ちよつと責めすぎたか？

「・・・」

ここまで沈黙が続くと、俺も困っちゃうんだけどなあ・・・

お？ちよつと顔が動いた。

「・・・・・・・・ん、ありがとう」

彼女は照れた顔を見せないようにそう言った。

やっぱり俺の予想通り！

彼女は『ツンデレ』だ！

実は俺はツンデレな女の子がタイプなのだ！

って、そんなこと誰も聞いてないか。

「テレビたり、モウソウしたりしてイルところにモウシワケないのデスが、ハナシをもとにモドシませんか？」

冷めた目で女の子は俺と彼女を交互に見つめた。

「あ！すまない・・・」

女の子にそう言われて、彼女はハツとして、先ほどまでの冷静な彼女に戻ってしまった。

もしかしたら彼女は女の子にこうやって時々突っ込まれているのかもしれない。

ツンデレなところが見れないのは残念だけど、今は真面目な話をしようとしているところだったので、またの機会を狙うことにした。つてか妄想をしてたわけじゃないんだけどなー。

「えっと、この部屋のことだよな。」

ここは『はざまの部屋』って言う。

名前の通り、あんたの世界とあたしの世界の間に存在する」

「どちらでもないってこと？」

「言い方を変えればどちらでもある。」

ただ今は仕事の関係上、あたしの世界よりあんたの世界に近い場所にある。

だから窓からの見える景色はあんたの世界のものだ」

彼女はコンコンと窓を軽く叩きながら言った。

「そつえばここに来る途中、変な感覚になったんだよね。」

周りの人達が俺のこと見えてないっていうか、すごく近くにいる

のに距離を感じるような・・・」

「それはあんたがはざまの部屋のテリトリー内に入ったからだろう。階段上がる前のところから半径百メートルくらいはこっちのテリトリーになると思う。」

残念ながらあたしはそのドアを使って出入りしないから正確なことはわかんない」

「え？じゃあどうやってこの部屋を出入りするの？」

「忘れたのか？」

開世の扉のこと」

「あ、そっか。」

それ使えばどこにでも行けるんだっけ？」

「初めて行く場所には住所が必要だけだな。」

一度行ったことがあって、頭の中で場所を思い描ければ住所は必要なくなる。

だからあたしの世界に帰るのは楽なもんなんだが」

「何をするにもいろいろ手順が必要ってことだね」

今までの話を聞いていて思ったのが、筆法陣が使えるとか、二つの世界を行き来できるとか、夢のような話のわりに、それを使おうとするとき、どこかしこに現実的な部分が多く入り込んでくる。

こんな不可思議な話をどこか受け入れられる自分がいるのは、彼女の世界にそういう部分があるからなのかもしれない。

なんでもありの世界だったら、嘘くさくて信じられたものではない。

「話戻すけど、あんたにとってここは、あんたの家から歩いてこれる距離に存在するビルだと思ってるだろ？」

でもそうじゃなくて、この部屋は基本的に二つの世界のはざまを当てもなく移動しているんだ。

移動している時に、あたし達の世界の力があんたの世界で通常よりも大きく反応している場所があると、この部屋は自動的にその場所に留まる。

そして依頼者をこの部屋へ引き寄せる。

そうして今はあんたがやってきたというわけだ」

「へえ、この部屋ってなんかすごいんだね」

「アタリまえデス。」

これがごシュジンさまのチカラなのデスから！」

女の子はそう言ったけど、彼女は少し寂しげな表情で首を振った。

「この部屋は借り物の力だよ。」

だからあたしにもよくわからないことはたくさんある。

だけどここが安全で安心な場所であることは間違いない」

この時俺にはなぜ彼女が寂しそうな顔をしたのか、まったくわからなかった。

理由は聞いたらいけない気がして自分から話を進めた。

「とりあえずここが俺の世界でも君の世界でもないということとはわかった。」

けどなんで俺は家に帰らないほうがいいの？

帰ってこないほうが変に思うかもしれないよ？」

そう言いながらまた疑問が浮かんた。

「それにピアーにここにいることがばれたりしないの？」

もし俺を監視でもしてたなら、俺の世界から俺が消えたの、わかつたりするんじゃないの？

そしたら今頃逃げ出しちゃうんじゃない？」

俺の怒濤の質問攻撃に彼女はちょっと苦笑いしながら答えた。

「じゃあ順番に説明しよう。」

まず、はざまの部屋に入った時に、ピアーがあんたを監視していた可能性。

その答えはノーだ。

なぜなら監視をされている状態なら、この場所を見つけれられない。あんた、家を出てからどのくらい歩いてここに来た？」

「確か一時間以上はふらふら歩いてたと思うよ」

「その一時間以上の間はピアーに監視されていたと思う。」

普通の人間があたし達の世界の力の影響を受けている時、そこには絶対にあたし達の世界の住人が関係している。

こっちの住人が近くにいる時には、はざまの部屋のテリトリー内に入ることはできない仕組みになってるんだ。

それくらいしないと容疑者全員に逃げられちゃって仕事にならないからな」

「つまりピアーからしてみたら、俺は無意味にふらふら歩いているように見えてただけで、はざまの部屋の実在には一切気付いていなかったってこと？」

「そうだ。」

途中でピアーも一時間以上ただあんだについていくのに飽きたんだろつ。

あんだのそばを離れた。

その瞬間、あんだはこの部屋のテリトリー内に入り込んだってわけ」

「どこに行ったんだろつ。」

俺から離れちゃったら力発揮できなくなるんでしょ？」

「すぐに能力がなくなるわけじゃない。」

充電式みたいなもんで長時間離れるとだんだん力が弱まってくるんだ。

だからちよつとそばを離れるのは問題ない。

それにあんだの世界にはあたし達の世界にないものがたくさんある。

自動車なんかがそうだ。

ピアーはまだ二十歳になったばかりだったから、そういうものに興味を惹かれてもおかしくないさ」

知らない世界。

知っていても行つたことのない世界。

どちらの場合でも初めて見るものに対しての興味っていうのはそんなに変わらないのかもしれない。

知識がどんなにあつても、結局は自分の目で見たものが自分にとっての真実なのだから。

「ちなみにだけど、あんたからあたし達の世界の力がどんなに強く出ている、ある程度の距離を離れてしまえば、その力をたどって対象者を探すなんてことはできない。

基本的に力の影響を受けられるのは目視できる距離にいるというのが条件だ」

「もしかして家に帰らないのはピアーと俺の距離を離して力を抜くのが狙い？」

「それもある。

今のヤツにできることはあんたが部屋に帰ってくるのを待つていることしかない。

探すこともできないが、体力の消耗と力の消耗はつながっている部分がある。

へたに動くよりかは無駄なエネルギーを消耗しないように待つているほうが確実だつてことはピアーもバカじゃないからわかつているだろう」

「俺が一日帰らなければ力は全部抜けるの？」

「んー、あんたの力の漏れ方普通じゃないから一日くらいじゃ全部は無理だな。

全部抜こうと思ったら三日くらいはかかっちゃうかも」

「三日!？」

そんなに待ってたら大家さんからのタイムリミットになっちゃうよ!」

「別に力を全部抜く必要はないよ。

タイムリミットがあるのも重々承知だ。

それでも今から捕まえに行くのは無計画すぎる」

「それじゃあ・・・？」

「明日の十七時、ピアーを捕まえに行く。必ずな」

冷静な女の子（後書き）

これから少しずつツンデレさせていきたいです
2011・9・14手直ししました。

今夜眠る場所

彼女はそう宣言すると、女の子に夕食の支度をするように言った。女の子が部屋から出ていくと彼女は話を続けた。

「もっと早い時間に行ってもかまわないけど、確実に捕まえるためにいろいろと準備もしたいしな」

「準備??」

「あたしの世界に戻って、ちょっとな」

「え！俺も君の世界に行けるの!？」

「ダメだ」

速攻で拒否られた!!

「あ、もしかして俺を連れていくとなんか問題がある・・・とか？」

「いや、別にあんたを連れていくとどうこうなるわけじゃない。

準備でやるのがてんこもりだから、あんたの相手をしてる暇がないだけ。

あんたを連れてると知り合いとかにいろいろ説明しなきゃならなくなるだろ？

その時間すら惜しいからさ。

悪いな」

「俺のためにやってくれてるんだから謝らないでよ！

俺の方こそごめん」

正直俺がいる世界と違う世界がどんなふうになっているのかすごく興味はあったけど、迷惑かけるつもりもなかったから、明日はおとなしく待つてることにした。

「いろんなことが立て続けに起きてゆっくりすることもなかったろ？明日は出かけるまでゆっくり過ごしなよ」

「・・・うん、そうする」

確かに何もせずにゆっくりするなんてこと、最近はなかった。だからお言葉に甘えることにした。

これまたイメージとは違うと言われそうだが、まったり過ごすのが実は一番好きだったりする。

友達付き合いはいいほうだからよく遊びに誘われる。

だから休みはだいたい予定が入っていて、なかなかゆっくり休む時間はない。

そういう生活の中でたまに自分だけの時間があるというのがすごく贅沢な気がするんだよね。

「ま、どうせ出かけたら、その後は当分バタバタすんだから」

彼女のその一言で、一気に現実に取り戻された。

ピーアを捕まえたらそれでおしまいってわけにはいかない。

俺は職もなければこれから家も失う身なのだ。

「・・・うう、出かけるまでの時間は『贅沢』なんじゃなくて『貴重』ってことか」

それから夕食が出来上がるまでの間に、今日休ませてもらう部屋に案内された。

『はざまの部屋』は外から見た時はビルだったけど、中は二階建ての一戸建てのような感じだった。

二階には、いくつか部屋があつて、そのうちの一つに入った。

そこには必要最低限の家具は揃っていたけれど、使われたような感じはなかった。

「他にも部屋はあるんだが、ベッドがあるのはこの部屋しかなくてな。

あまり使っていないけど、ちゃんと掃除はしてあるから」
「全然大丈夫だよ。」

むしろこんなにちゃんとした部屋にいいの？」

「かまわないさ。

ただし、タンスは開けんなよ?」

「えっ??」

「ここ、あたしの部屋だから」

「マジすか!!」

なんだ、この展開!

好きになった人と同じ屋根の下で過ごすっただけでもドツキドキなのに、好きな人の部屋に寝るだなんて急展開すぎるでしょ!!
いや、まてよ・・・じゃあ彼女は・・・

「あ、あの、俺が君の部屋で寝たら君はどこで寝るの?

ま、まさか同じ部屋で・・・」

「んなわけあるか。

あたしのことはあんたが心配する必要ない」

「あ、さいですか・・・」

まあ、そうですね。

にしても「心配する必要ない」とは結構手厳しいこと言うなあ。
彼女にとって俺はあくまで『依頼人』で、女の子にとって俺はあくまで『おきやくサマ』でしかないのだから、しょうがないといえましょうがないのだけど。

「アア、コチラにいらっしやいマシタカ」

女の子がドアからちょこつと顔を出して言った。

「オマタセしました。

アトすこしでデキあがりマス」

「わかった、すぐ行く。」

そう言われて女の子はパタパタと去って行った。

「あたしは基本的に寝ないんだよ」

突然そう言われて俺は彼女のほうに振り向いた。

「寝なくても問題ない、が正確な言い方かな。」

「これもあんたとあたしが違う世界の人間であることの証明なのかもな」

「じゃあなんでベッドがあるの？」

「さつき体力の消耗と力の消耗はつながってる部分があるって説明したの覚えてるか？」

「君曰く、ピーアが俺を無理に探そうとしない理由がそれだったよね？」

「そうだ。」

つまりあたし達の世界の力が消耗しない限りは体力も消耗しない」

「だから寝る必要もないってことか」

「逆を言えば力を使いすぎればそれを回復させるための手段が必要となる。」

その一つが『寝る』という行為だ。

一番回復力が高い。

だけど一度眠りにつくと力がある程度回復するまでは起きない。

その間は無防備だから、万が一そこを狙われたりでもしたら、どんなにすごいヤツでも一発でやられちゃうだろうな」

「じゃあなるべく寝ないほうが君達にとってはいいってこと？」

「そういうこと。」

だから寝ないことは元気な証拠。

心配する必要がないって言ったのはそういう意味」

そう言っただけで彼女は俺の顔を覗き込んだ。

「ちょっと冷たくされたくらいで落ち込んでたら疲れるだけだぜ？」

「うん！？」

俺、また顔に出た！？」

「ふっ、わっかりやすいヤツ」

彼女は機嫌よくそう言っただけでドアに向かって歩き出した。

その後姿はまるで小悪魔のように見えた。

俺としてもここまで気持ちを讀み取られると恥ずかしくて仕方がない。

もしかしたらさっきの『シンデレ』の仕返しなのかもしれないなと思っただ。

『シンデレ』の上に『S』とは最強の組み合わせだ。

ま、ぶっちゃけその組み合わせも嫌いじゃない！

「こりゃ、やっかいな相手になりそうだ・・・」

「ん？なんか言ったか？」

「いえいえいえいえいえ！」

夕食楽しみだなあって！！」

「あいつの作るご飯は普通にうまいよ。」

クッキーも悪くなかつたろ？」

「そうだね。」

たまに抜けてるけど」

「そのたまの抜け方がハンパじゃないけどな」

「でもそれがあの子のかわいいところでしょ？」

「あんた曰く、なんでも完璧じゃつまんないってことだろ？」

「そうそう！」

・・・あ、気にしてる・・・？」

「さてな」

そんな会話をしていると女の子の大きなくしゃみが聞こえた。

なんともマニュアル通りの反応だな、と感心したのは言うまでもない。

朝ご飯は大事です

それから俺達は三人で夕食を食べた。

出てきた料理がかなりしつかりした和食だったのにはびっくりした。

「なにをツクルか、トテモなやみましたけど、ワシヨクならまちがない力ナって」

女の子はニコニコしながら言った。

彼女の言った通りかなりおいしくて、久しぶりに家庭の味を食べたなって感じだった。

俺も料理はできる人間だけど、いろいろありすぎて自分で飯を作る余裕もなかったし、ここ何日かはともに飯が食えるような状態でもなかったから、あっという間に食べてしまった。

「ほんとにうまいよ。」

これで同い年とかだったら惚れてるかも・・・」

「エッ!？」

そんなにホメてもなにもデテきませんヨ!！」

「・・・よかったじゃねーか。」

嫁ぎ先見つかった」

「あ、でも料理ができなきゃダメってことじゃないよ!

俺自身ができるタイプだから、そこはあんまり問題じゃないから」

「では、ごシユジンさまでもマツタクもんだいナイということデスネ」

「な!

おまえ何さらっと言ってやがる!」

「エ?

だってイマシガタふてくされていませんデシタカ??」

「ふ、ふてくされてねーよ!！」

そうして二人の言い合いが始まってしまった。

でもなんだかそんな姿もほえましくて、この時間がずっと続けばいいのにな、なんて思った。

初めて来た場所。

初めて会った人達。

初めて知る世界。

全部初めてなはずなのに、今となってはなぜか全部がとても懐かしい気がしたんだ。

「おい、聞いてんのかよ？」

「へっ!？」

「キイテいなかったヨウですね」

「あ、ごめん。」

「考え事してて」

さっきまでギヤーギヤー言い合っていたのに、どうやらそれは話が済んだようだった。

「明日の朝飯、何が食いたいのかって聞いてんの」

ふてくされてるとかの話から、どうなったら朝ご飯の話に変わるの??

女の人達って話があればよあれよと進んで行くからすごいよなっけいとも思っただよね。

「朝ご飯ですか？」

俺、あんまり食べてないから別になくても・・・」

「イイわけありません!」

女の子がすごい勢いで反論した。

「アサごはんタバナイと、イチニチがんばれマセン!

カルクでもかまいませんので、ゼツタイにたべてクダサイね!」

「りよ、了解しました!!」

「ごシュジンさまですよ!」

「げっ、とばっちりじゃねーかよ」

女の子は言いきると食べ終わった皿をシンクの方へ片付けに行った。

「なんかお母さんみたいだなあ」

「そんじょそこらの母親より厳しいよ。」

嫌いなもの残すと、食べ終わるまで席から立たせてくれないし」

「俺、昔学校の給食で同じことあった。」

泣いても許してもらえなかったし、昼休みになってもそのまま席で食わされたな」

「風呂あがって髪ちゃんと乾かさないと、めっちゃ言われるし」

「風邪ひくからってこと？」

めっちゃ優しいじゃん」

「優しいか？口うるさいだけだろ」

「ごシユジンさまがキッチンとやらないからデスヨ」

女の子はしっかりと食後のお茶を持って戻ってきた。

「でも家事、いろいろやってくれてるんでしょ？」

そしたらあんまり君も文句は言えないね」

「そのトオリです。」

サスガおきやくサマはわかっていらっしやいます」

「結局あんたもそっち側かよ」

「俺も家事ができる身だから、家事の大変さはわかってるつもりだからねえ。」

こんなふうになんて言わなくても食後のお茶持ってきてくれるなんて、かなり気が利くし。

これで文句言ったら罰あたるよ？」

「ソウダそうだー！」

モットいつてやってクダサイ！」

「わかったよ！」

あたしが悪かったよ。

朝ご飯食べりゃあいんだろ。

けど明日は朝早くから出掛けるから手軽なものにしてくれよ？」

「じゃあ俺も朝ご飯の支度手伝おうかな。

何もしないのも気がひけるし、一人より二人でやったほうが楽しいじゃん？」

「おきやくサマはホントウにやさしいのデスね。

ではオネガイします」

そんな約束をして、女の子の片づけの手伝いをした。

彼女は明日の準備があるということで部屋から出て行った。

女の子の話だと、いろんな資料とかがある書斎があつて、その部屋でこもって仕事をするらしい。

自分のことなのに、自分は何もできないのだと思うと、やっぱりとても申し訳ない気がした。

「テキザイテキシヨですよ」

女の子は俺を気遣つてか、そう言った。

適材適所か。

「今の俺にできることは・・・うまい朝ご飯作ること、かな」
そう言った俺に女の子はとびきりの笑顔を返してくれた。

必要な無駄と必要のない無駄

次の日は朝七時に起床した。

女の子の話では彼女は彼女達の世界の役所のようなところに行くらしい。

そこは九時オープンだから、二時間も前に準備を始めればいいと言われていた。

どうやら彼女達の世界と俺の世界の時間の流れは基本的には同じのようだ。

俺が起きた時にはすでに女の子はばっちり起きていた。

「おはよう」

「おはようゴザイマス。」

ヨクねむれマシタか？」

「なんか久々にぐっすり眠れた気がするよ。」

さて、何から手伝えばいいかな」

「ではコレをキツテもらえますか？」

そうして俺達は朝ご飯の支度を進めていった。

彼女が部屋から出てきたのは八時頃だった。

それからみんなで一緒に朝ご飯を食べた。

今日は昨日の和食とは打って変わってモーニングって感じの朝ご飯だ。

彼女曰く「今日はいつも以上に気合の入った朝ご飯」だったそうだ。

「じゃあちよつと行ってくる。」

十七時前には戻る予定だけど、少し遅くなるかもしれない。

とりあえずあたしが戻ってくるまではここで待っていてくれればいいから」

そう言い残し、彼女が出て行ったのは九時少し前だった。

朝ご飯の片づけが済んでしまうと、特にすることがないからテレビでもどうぞ、と勧められた。

「テレビって普通に見れるの？」

「ハイ。」

このへやがハザマをさまよっているトキはミレマセンが、イマミたいにおきやくサマのセカイのどこかにトドマツテいるトキはミレルのです」

そう説明しながら女の子はテレビをつけた。

そこでは見慣れたアナウンサーが今日のニュースを読み上げていた。こうしていると自分が自分の世界と知らない世界のはざまにいることを忘れてしまいそうになる。

「なんかテレビ見るのも久しぶりだなあ。」

二人はいつも見てるの？」

「ワタクシはアマリみません。」

「ごシュジンさまはミレルときはミルようにしてイラッシャイマス」

「ふーん。」

テレビが好きってこと？」

「スキというよりはチシキをエルためというハウがアツテイルきがシマス」

「そっか。」

君達にとって俺達の世界にも未知な部分があるわけだ」

自分の世界と違う世界が存在していると知っているとはいえ、だからってなにもかも知っているということには当然ならない。

俺が生きている世界から彼女の世界へ意思を持って情報を発信することはあり得ないのだから、自分から情報を得ようとするのは当たり前前といえは当たり前なのかもしれない。

こうして俺のような人間と会話する時に最低限の知識や情報がなけ

れば、わかりやすく説明することも不可能になっちゃいます。
彼女なりに見えない努力をたくさんしているのだろう。

そのままテレビを見させてもらっていたら、気付けばお昼になっていた。

自分の世界のことなのに知らないニュースが山ほどあって、食い入るように見てしまっていたらしい。

「知らない世界のこと気にする前に自分の世界に興味持たなきゃだよなあ」

ちよつと反省しつつ、何か手伝えることがないかと女の子を探した。女の子は掃除をしていたらしく、昼ご飯の手伝いを申し出ると嬉しそうにした。

「ダレカといっしょにカジをするのはホントウにヒサシブリなんです」

昼ご飯も食べ終わり、テレビをつけたまま、食後のお茶を飲みながら女の子とおしゃべりをした。

女の子曰く、彼女は本当に必要最低限のことしかしないらしい。

『無駄なことをしなすぎる』のだそうだ。

「ジンセイにおいてすこしクライむだなコトもヒツヨウですよね？」
この子はたまに異常なほど大人びた発言をすることがある。

見た目は子供だけど、中身は俺よりも年上なのかもしれない。

見た目が子供なら中身も子供だなんて常識は通用しない世界の人なのだから。

ふと昨日彼女とした会話を思い出して、疑問に思ったことを聞いてみた。

「あのさ、君の世界の人達は寝なくても平気なんですよ？」

夜は何してるの？」

そう言くと女の子はきょとした。

「あれ？」

昨日彼女がそう言ってたんだよ。

寝ないってことが元気の証拠だって」

「アア、ごシュジンさま、またソナおおげさなイイカタを・・・」
あきれた様子の女の子の反応からして、どこかに間違い、というか
オーバーな部分があるようだ。

「マツタクねなくてもヘイキなのは、ごシュジンさまのようにちか
らがツヨイひとたちだけですよ」

「じゃあ君は夜はちゃんと寝てるんだ」

「モチロンです。」

たしかにイチニチかフツカなくてもニチジョウにシショウがで
ることはアリマセン。

でもそのジョウタイでちからをツカオウとすればカラダにかなり
のフタンがかかってシマイマス」

「力を使いすぎると体力も消耗するから体自体に負担がかかる。
心臓にも悪いってことだよな？」

「ソウです。」

ちからはムジンゾウではアリマセン。

フツウはしっかりネテ、しっかりタベテ、ちからをカイフクさせ
ます。

ちなみにネルよりタベルほうがカイフクははやいデス」

「へえ、そうなんだ。」

栄養を吸収するからってことなのかな」

「せんもんテキちしきがナイので、それについてハッキリとしたこ
たえはダセマセンが、とにかくフツウはおきやくサマとオナジよう
なセイカツさいくるでいきいマス」

「だけど彼女は例外」

「ハイ。」

ごシュジンさまはツウジョウのセイカツれるのちからのショウ
ヒくらいでしたら、ほっておいでもスグにカイフクしてしまいます。

ヒツホウジンをちよつとエガクくらいもたいしたシヨウヒにはありません。

それはアルいみでゴシュジンさまのサイノウです。
いってしまえば、ちからはムジンゾウにチカイのです」

「君が彼女に対してすごいって言っていたのはそういうのも含まれてるんだね」

「ゴシュジンさまはイロイロなサイノウをおもちデス。

ですが、ソウイウひとほどジブンにたいしてムトンチャクになりがちなのデス」

「寝る必要も食べる必要もないのならそれもしようがない、か。

彼女、仕事人間っぽいし、そういう人は特にそうなっちゃうのかもしれないね」

「ワタクシがネテくださいとオネガイをしても、それはナカナカむずかしいのデス。

ネルというのはホンニンしだいデスから。

でも、タベルというのはツクツテしまえばコツチのものデス。

ゴシュジンさまもネはやさしいヒトですから、ツクツタものをタベズにするというコトはしません」

「君は彼女のことをすごく大切に想っているんだね」

「ハイ、とても。

ゴシュジンさまはワタクシのいのちのオンジンですから」

そう言った女の子はとても穏やかな顔をしていた。

本当に感謝しているのが伝わってきた。

「ですが、サイショはゴハンをつくってもタバテはもらえなかったのデス。

ソウジをしても、そんなフウにしてもイミないってつめたくイワレタものデス」

「何をしても受け入れない的吗？」

「ホントウにそんなカンジでした。

イマもツンツンですが、イマよりもサラにツンツンだったのデス。デレのようそがアルだなんて、そのトキはオモイもしませんデシタ」

それを聞いて俺はつい吹き出してしまった。

「どうミテも、ごシユジンさまはつんでれデスよね？」

「いや、まあ、そうかなとは俺も思っただけど・・・」

「ってか君、ツンデレなんて言葉知ってるんだ！」

もしかして君の世界でもツンデレって言葉があるの??」

「イイエ。」

これはごシユジンさまがてれびをミテいるトキに、タマタマいっしょにミタばんぐみでセツメイされていたのデス」

「つまり彼女もツンデレがなんぞや、ということとはわかっているんだね？」

「それはリカイされたようデスが、ジブンがつんでれでアルというジカクはナイようでしたヨ。

コンナやつの子がいいのか、アタシにはサッパリわかんねー、ってオツシャツテいたので」

「ああ、さらにと自分否定しちゃったわけだ。

ツンデレだよって指摘しても絶対認めなそうだなあ」

「それはおきやくサマのみのアンゼンをマモルためにも、シテキしないことをオススメいたします」

「うん、俺、まだ生きてたいからやめとく」

そう言って二人で笑いあった。

話が一段落すると、女の子は掃除の続きをやって、別の部屋に移動した。

俺はテレビをぼーっと見ていたが、気付いたら眠ってしまっていた。

次に意識が戻ってきた時はおでこをペシッと叩かれた時だった。

「よく眠ってるとこ悪いな。

そろそろ時間だから起きろ」

どうやら彼女は一仕事を終えて戻ってきたばかりのようだ。行く時に持っていた書類のバッグを持ったままだった。自分の腕時計に目をやると十六時半を少しまわったところだ。

「おかえりなさい。

すぐくゆつくりさせてもらっちゃった」

「退屈だったる？」

「これでもかなり早く終わらせてきたんだけど」

「退屈ってことはないよ。」

「久しぶりにテレビも見れたし、昼寝もできたし」

「それはなによりだな。」

「悪いがもう少し待っててくれ。」

「着替えてくる」

そう言って彼女は部屋から出て行った。

部屋に一人になったら、なんだか急に不安になってきてしまった。

ここでピアーを捕まえられなければ俺はどうなるんだろう。

というより捕まえたとして、俺はこの先どうやって生きていけばいいのだろうか。

いろんな考えが頭の中を横切るけど、全然整理できないでいた。

それに頭の中がもやがかかったみたいで、何か大事なことがある気がするのにそこにたどり着けない。

それはとても単純なことのような気がした。

気がするだけで本当にそうなのかはわからないんだけど・・・

そんなふうにグルグル考えていたら、着替えを済ませた彼女が戻ってきた。

それまで着ていたロングコートを脱ぎ、俺達の世界で言う普通の女の子の格好をしていた。

ただ胸のポケットには二本の万年筆が異様なほど輝いていたけれど。

「どうしたの？
その格好」

「残念ながらあたしにはしつばや耳が生えてないからあんたらの世界の人間に見えちまうんでな。」

あの格好であんたの世界をうるつくのはちよつとおかしいだろ？」
確かに。

違う世界の服だと思えば何もおかしくはないけれど、俺の世界で言う普通の女の子がする格好ではない。

「逆に姿を消す服もあるんだけど、今回はあえて姿を見せたほうがあつちも動きそうだからな」

そう言いながらパンツのポケットから彼女は指輪を取りだした。

「それからこの指輪はあたし達の世界の力を隠す効果がある。」

これをつけてると服だけじゃなく、あんたの世界の女の子とまったく一緒になるわけだ」

「そうすることが捕まえるために必要だってこと？」

「そういうこと。」

んで、一応あたしの設定はあんたの彼女」

「んえっ！？」

「変に動揺すんなよ。」

彼女が嫌なら友達以上恋人未満でも問題ないけど」

「いや！

彼女でやらせてもらいます！！」

「気合の入るところ、おかしくないか？

まあいいけど」

ちよつと不思議な顔をしながら彼女は説明を続けた。

「とりあえずその設定であんたと一緒にちよつと離れた場所からあなたの部屋に帰る。」

んでヤツが動き出すまでその部屋で過ごす。

その時はとにかく楽しそうにすること。

すごい嫌なことがあったのに全部吹き飛んだ、くらいの勢いで幸

せそうにするんだ」

「楽しそうに、だね。」

うん、俺は大丈夫だと思うけど・・・」

「なんだよ、その目は。」

あたしだってやる時はやるから安心しろよ。

ちゃんと普通の20代の女性を演じてやる。

これでもちゃんとテレビ見てるからの外的なことは言わないよ」

こういう時にもテレビの知識は役に立つわけだ。

ただ俺としては彼女がどんな感じで演じるのか想像がつかないから心配だったんだけど。

「ここまであんたは救いようがないくらいの絶望をピアーの手によって味わった。」

ピアーとしても、やってやったという達成感でいっぱいだろう。

なのに、一日いなくなっただと思っただけ突然彼女を連れてきて、とっても幸せそうにしている。

そしたら何か邪魔してやろうと思うだろう？」

「うーん、まあそんなくらいひねくれててもおかしくはないかもね」

「ヤツとしてもいろんなことが自分の思い通りになって浮かれてい

るだろうし、変に自信もっているだろう。

そこにつけこむ。

基本的に捕まえるためには現行犯逮捕が理想だしな」

どこの世界でも状況証拠だけでは決定打にはならないということな

のかもしれない。

「でもうまくいくかな」

準備は完璧だから、あとはひっかかるのを待つだけだ」

「ダメだったら？」

「その時は実力行使に出るさ。」

ほっとくわけにもいかないからな。

心配すんな。

別に捕まえられないわけじゃない。

ただあたしとしても無駄な争いはしたくない。

争う前に相手に抵抗する気をなくさせるのも捕まえるのに必要なことだとあたしは思ってる」

無駄なことはしない。

必要最低限で済みます。

彼女はそういう人なのだ。

そして今はまさにそれをいかになく発揮する場面であることは間違いない。

「さて、何か他に質問あるか。

あと言っておきたいことがあるなら今のうちにな。

あんたの部屋に向かい出したら相談とかはできないから」

「うーん・・・ちょっとシュミレーションしてみたけど、正直どうなるのか想像できないや。

とにかく俺は君と楽しく過ごせばいいんだよね？」

「そうだ。

他のことは何も気にしなくていい。

ただ一つ望むことがあるとすれば、うまく会話をリードしてくれること、かな」

「えー、それって結構プレッシャーだなあ。

ま、だてに見た目チャラくないですから、頑張っちゃいますけども」

彼女と話しているうちに少し緊張がとけた気がした。

「じゃあ出会ってすぐに付き合ったばかりの初々しいカップルってことにしようか。

そのほうが知らないことがあっても自然だし。

あとはなるようになるよね！」

俺がそう言っていると彼女は笑ってうなずいた。

時間はすでに十七時をまわっていた。

演技も才能の一つ・・・？

扉の先に見えるのは見覚えのある公園だった。そう、すべてが変わってしまったあの公園だ。

「やり直すって意味ではもってこいの場所だろ？」

彼女はちよつと皮肉っぽく言って、扉の向こう側へ進んだ。

「おきやくサマ、ワタクシはゴイッショできませんので、ココでオワカレです」

女の子が少し寂しそうな目をして言った。

「お気をつけて」

そう聞こえた気がした。

女の子は深くお辞儀をしていた。

俺は覚悟を決めて扉の先へと一步を踏み出した。

十七時を過ぎても六月も終わろうとしているこの時期はまだ空は明るい。

だけど相変わらずこの公園はこのくらいの時間になると急に暗い雰囲気になる。

人がいなくなるからだ。

「さて、周りは誰もいないな」

彼女は辺りをキョロキョロと確認した。

「この扉を消した瞬間、あたし達はこっちの世界の人間に見えるようになる。」

まああんたみたいに異常に力が強い人間がいるなら何か感じるかもしれないけどな」

そう言いながら彼女は万年筆で扉を軽く叩いた。

その瞬間、扉はそこから消えてなくなった。

「なんか見えてるとか見えてないとか、ピンとこないなあ。」

俺達を見る側からしたら突然人が現れるわけだからびっくりする
どころの話じゃないんだろうけど」

「そのために姿を消す服があるんだよ」

そう言いながら彼女はさっき説明していた力を隠す指輪をつけてい
た。

「そいじゃ作戦開始、だな」

そこから他愛もない話をしながら家へと向かった。

彼女の何を何も知らないわけだから、聞くことには困らなかった。
というより、彼女の演技力は想像以上だった。

「好きな食べ物？」

うーん、そうだなあ。

あんまり食欲ないから、食べ物に対してこだわりはないんだけど、
果物とかが好きだよ」

「趣味？」

音楽聞いたりするのは結構好き。

あとテレビもよく見るよ。

見るのは情報番組が多いんだあ」

さっきまでの口調はいつたいどこへ？

語尾にちっちゃい「あ」とかついてますけど！

さっきまでの偉そうな態度は幻？

顔立ちがやわらかい！笑顔もかわいい！！

もしかして二重人格なのではと思ってしまっほどの変化っぷり。

そして、どこまでが真実なのだろうという素朴な疑問。

食欲がないっていうのは食べなくても平気って意味だろう。

テレビをよく見るっていうのははざまの部屋での女の子の証言があ
る。

果物が好きっていうのと音楽を聞くっていうのは通常時の彼女からは想像できない。

さすがに今「それって全部ほんと？」って質問するのはリスクが高すぎるから、落ち着いたら聞いてみようと思った。

そんな感じで彼女と会話をしていたら、あっという間に自分の部屋に着いた。

もしかしくなくてもどこかでピアーが見ているのかもしれないと思うと、鍵を開けるのにちよつと緊張してしまった。

彼女も今は力を抑えてしまっているからピアーが見えていない。こんな状態でいったいどうやって捕まえるっていうんだろうか。

「おじゃましまーす。

わぁ、思ったよりもきれーい」

相変わらず演技派な彼女はかわいい彼女を演じていた。

彼女は俺にただ楽しそうにしていればそれでもいいと言っていた。

ここで不安になっていても状況は変わらない。

俺は彼女の言葉を信じるだけだ。

「適当に座つてよ。

今お茶出すから」

「うん、ありがとお」

彼女は部屋の中をうろろろしていた。

その姿は普通の人からしてみたら、彼氏の家に初めて来た彼女が興味津津に部屋を見ているようにしか見えないだろう。

けど俺にはその姿が、力を抑えてピアーが見えないながらに何かを探ろうとしているようにも見えた。

俺には気付けないけど、彼女にならわかる何かが部屋には残ってるのかもしれない。

お茶を淹れながら、俺はまた何かにひっかかっていた。
違和感がある。

こっちに帰ってきてからその感覚がだんだん強くなっている。
そしてそれは本来は、とても当たり前のことなのに、とても大事な
ことなんだ。

そこまではわかるのに、やっぱり頭の中にもやがかかっているよう
な感じで、答えにたどり着けない。

「ねえ、ほんとにうるさくしちゃったの？」

「え！？」

違和感のことで頭がいっぱいだっただせいで彼女が何を聞いたのか、
認識できなかった。

「だからあ、この部屋、出て行かなくちゃいけなくなっちゃったで
しょ？」

夜中にうるさくするからって」

「あ、ああ、そうなんだ。

だから明日とか一日かけて準備しないと」

彼女のその質問が何かを導こうとするためのものだとなんとなくわ
かったけど、改めて質問されると現実が押し寄せてきてむなしくな
ってくる。

「それにお仕事もクビになっちゃったんでしょ？」

ほんとに身に覚えがないことなのに」

「それに関してはまいったよ。

けど状況的に俺しか犯人いないしさ」

「あのね、話聞いてて思ったんだけど・・・

あ、頭がおかしいヤツだなとか思わないでね？」

「うん、言ってみて」

「なんか変なのにとりつかれてるんじゃないかなあって」

「変なの？」

たぶん彼女の的にここからが本題なのだろう。

出発前に彼女が俺に望んだことは、うまく会話をリードしてくれること。

だったら俺はそれに徹するだけだ。

「そう、だってね、おかしいもん。」

夜中に物音がうるさいっていうけど、あたし家で寝てる時は静かだもん。

「暴れたりしないよ？」

普通のカップルの会話だったら、ちよつと甘い感じもする。

しかしながら実際のところは、あたしの家っていうのははざまの部屋のことだ。

物は言いようっていうのはこのことだなと思う。

「それなのに隣接してる部屋全部からうるさいって苦情くるなんて変だよ。」

なんか変なのがいたずらして、うるさくして、その原因をなすりつけてるんだって考えたほうが自然な気がするの」

「うーん、俺としてもいまだに自分がしたことだって自覚が起きないっていうか。」

変なことになっちゃったなあって思ってるけど」

「それにね、職場でのことだって変だよ。」

それだってね、変なヤツにつきまとわれてるって考えた方が自然だよ。

そいつがお金を抜いたり、机の中にお金入れたりしたんだよ。

もちろんそれを他の人達に言っても、こっちが頭が変だって思われちゃうけど・・・」

「俺のこと信じてくれてるんだね」

「当たり前だよ。」

あたし彼女だもん。

だからその変なヤツもあたしの敵！」

ここまでの話を単純に聞いていればただのバカカップルだ。
でも俺はこの時彼女の目の色が変わったのを見逃さなかった。

「そいつ絶対性格悪いよ。」

今もどつかでうちらのこと見てるのかも」

「そんなのストーカーじゃん」

「ほんとほんと。」

それにやり方が卑怯だよな。

自分が見えないからってやりたい放題やるってさ。

きつと自分のこと、頭いいとか思ってるんだよ。

自分一人の力じゃなんにもできないくせに。

そいういうヤツに限って、勘違いするんだよねえ」

突然ヒートアップし始めた彼女を見て、俺はちよつと苦笑した。

「んもう、自分のことなんだから、もつと怒りなよー！」

ってか、ほんとに力があるっていうなら今何かやってみろって思
っちゃう。

見えないところでコソコソやるような卑怯なヤツだから、どうせ
できないだらうけど。

もしかしたら、あたしが一人になってから何かされるのかなあ。

それしたらほんとに卑怯だよな」

カシャーーーーーーン！！！！

彼女が最後の言葉を言い終わるか終わらないかくらいのところで、台
所のほうでグラスが割れる音がした。

びっくりして彼女のほうを向くと、彼女もびっくりした顔をしてい
たけど、一瞬口元がゆるんだのを俺はまたも見逃さなかった。

「まさか・・・ね。」

グラスの置き方が悪かったんじゃないのぉ？」

「あ、ああ、もしかしたらさっきお茶用意する時にぶつかったりし

たのかも。

「ちょっと片づけてくる」

俺は台所へ向かった。

といつてもリビングから台所は見えるのでお互いの姿は認識できる。

「もしこれが変なヤツがやったことだとしたら、ちょっと中途半端だよなぁ。」

どうせならこれとか落としてみせればいいのに」

彼女はそう言いながら俺のほうを見て自分の真上にある照明を指差した。

「これが落ちてきたらホンモノだよね！」

なんていうか認めざるを得ないっていうか・・・」

俺は割れたグラスを片付けつつ、そう言う彼女のほうを見ていた。そして視線の先で何かが動いた。

「危ない！！！！」

俺がそう言った瞬間、突然部屋が光って、俺は動けずに目を閉じていた。

目を開けた先にはいつも通りの表情を見せる彼女が仁王立ちをしていた。

仁王立ちをしながら見つめる視線の先には、光る紐のようなものでグルグル巻きにされたオコジョらしきものが横たわっていた。

「作戦通りってとこかな」

彼女は俺のほうを向いて、ニツと笑った。

「無駄な争いはしたくないって言ってた割には、結構やり方粗くない？」

「無駄な争いの話はこっからだから」

彼女はそう言うと、オコジョらしきものを起こして座らせた。

「く、くそう、こんなはずじゃぁ・・・」

「みんな、捕まった時はそう言うんだよ。」

あんたの名前はピアで間違いないな？」

そう言っているとグルグル巻きのオコジョらしきものはうなずいた。

つまり、俺の人生を狂わせた犯人ピアは、無事捕まったのだ！

理由があっても罪は罪

「まだちゃんと捕まえたことになんねーよ？」

彼女はちよつと残念そうな顔をしながら俺にそう言った。

「な、なんでよ！」

今まさに捕まってるじゃんか！！」

目の前にはグルグル巻きにされたピアーが座っているのだ。

この状況のどこをどう見れば捕まってるないことになるのか・・・

「確かに拘束はしてるけど、これは今しがた照明を落としたことに對する拘束だから、あんたの件とはまた違うんだよ」

「あ、そういえば照明は・・・」

照明があるはずのところに目をやると、そこには照明のプラグの差しこみ口だけがあつて、照明自体は存在していなかった。

さつき光った時に落ちた音はしなかったのに、どこにいったんだろう？

「照明は一回消した」

「へ？」

「筆法陣で別の場所に保管してるっていうほうが正確な言い方だけど。」

一応、あれは物的証拠になるからな。

で、照明ないと暗いから、今は筆法陣で部屋を明るくしてる」

天井を目をこらして見てみると、うつすらと何か線が書いてあるのが見えた。

「あ、そうなんですか。」

「というか俺、あんまり状況把握できてないや」

俺が目をつぶっていた間にいったい何が起こったというんだろう？

「後で説明してやるから」
彼女はそう言ってピアーに向き合った。

「つうわけで、ピアー、自分が今なんでその状態になってるか、ちゃんと理解しているな？」

ピアーはうなだれたまま、コクンとうなずいた。

「説明してみろ」

「・・・こつちの世界に危害を加えようとしたから、だろ」
「そうだ。」

これはあたし達の世界の基本ルールだ。

たとえどんな理由があろうとも、こつちの世界のものに余計な危害を加えてはならない。

それは物に対しても、人に対しても、だ。

もしあたしが本当にこつちの世界の人間だったなら、大けがさせてるところだったんだぞ」

「・・・」

ピアーは何も言おうとしない。

いや、たぶん言いたいことは山ほどあるのだろうけれど、言ったところでそれが無意味なことだとわかってるのだろう。

「まあ、いい。」

理解していようとしていまいと、やったことは事実だ。

それに対して償いはしてもらうことになる。

だが、おまえには別の疑いがかかっている。

それがなんだか、思い当たる節はあるか？」

彼女がそう問いかけてもピアーは何も言おうとしなかった。

どの世界でも黙秘権というものが存在するのだろうか？

「じゃあはつきり言おう。」

あんたには、そこにいる男の人生を狂わせたんじゃないかっていう疑いがかけられている」

「目撃者でもいるのかよ」

やっとしゃべったと思ったら、まったく反省の色がない発言だ！
さすがの俺もちょっとイライラしてきた。

「逆にいないと思うのか？」

彼女はピアアの発言にまったく動じず、そう聞き返した。

「・・・俺は何も知らない。」

何もしてない。

この男のことも知るわけないだろ。

今日初めて会ったんだから。

それともあいつが前にどこかで俺を見たともいうのかよ」

ピアアは挑発的な目で俺を見た。

確かに俺は自分の目でピアア存在を確認していない。

だからピアアの発言に対して、俺は何一つ言い返すことができなかった。

「では、あいつがあたし達の世界の力が強くて、あいつのそばにいると普通だったら触れるはずのないこっちの世界のものを触れるようになることもついさっき知ったと？」

「そうだよ。」

力が強いかどうかは近付いてみればわかることだろ？

おまえらが外を歩いている時にそれに気付いて、部屋までついてった。

そしたら俺達のような存在をバカにするような話になった。

ム力ついて試しに台所のグラスを触ってみたら、触れたからそのままグラスを落としてやった。

それで照明も落としてやろうと思ったんだよ」

相変わらず悪びれなくピアアは話している。

だいたい照明落とすって相当悪質だぞ。

それなのに俺は悪いことしてないって態度がすごく癪に障った。

「わかった。」

あんたはこの男に初めて会って、今までに一度も面識がない。だから人生を狂わせるなんて話には身に覚えがない、と」

「そうだよ！」

何回も同じこと言わせるなよ」

あー！！あつたまきたっ！！

さすがの俺も我慢の限界！！

ピアーに一言物申してやろうと思った時、彼女はそれに気付いて手で制止された。

「お前がこいつに言いたいことがあるのはわかる。」

だけどそれは今言うべきじゃない。

きちんと後で言わせてやるから、もう少し待ってる」

そう言った彼女の顔にはすぐ余裕があった。

むしろ自信がある、と言ったほうがいいかもしれない。

俺はその顔を見て、彼女の言う通りにしようと思った。

たぶん、彼女はピアーに対して絶対に言い負かす何かを持っているのだ。

「では、おまえのその証言をひとつひとつぶして行ってやるよ。」

その前にまず、おまえ、あたしがどんなヤツだかわかってる？」

その質問にさすがのピアーもキョトンとした。

俺にもその意味がよくわからない。

そして、また俺の中で何かがひっかかった。

彼女がどんなヤツなのか？

俺は彼女の何を知っている？

・・・いや、違う。

俺は彼女の『何を知らない』んだ？

「おまえ、あたしのこと、そこらへんにいる筆術師よりちよいと能力があるヤツだと思ってるだろ？」

だから適当に言いくるめれば、今しがた危害を加えようとした罪だけで捕まると思ってるんだろ？」

「どういう意味だよ」

「これを見ればわかるんじゃない？」

彼女はそう言つて、万年筆が入っている胸ポケットからバッジのよなものを取り出して見せた。

ピアーはそれを見た瞬間、顔が凍りついた。ように俺には見えた。

「ま、まさか、そんなことあるのかよ」

ピアーのその言葉には先ほどまでの勢いはなかった。むしろおびえているようにも聞こえた。

俺のいる場所からはバッジの正面に何が描かれているのか、わからなかった。

そのバッジがいったいなんだというのだろう。

「ふっ、理解したみたいだな。

つまり、おまえには逃げ場ないってこと。

相手が悪かったなあ。

さて、このままあたし達の世界へ連れ帰って話を聞いてやってもいいんだが、それじゃあいつが納得できない」

彼女はそう言つて、俺のほうを指差した。

「そういうわけで、おまえには今からのあたしの個人的な尋問に付き合ってもらうぞ。

自分の罪の重さを、自分が傷つけてしまった相手の前で思い知らせるのが一番反省するだろ？」

それが終わったらすぐに取締部のヤツらに引き渡してやるから」確かにそれはなかなか酷なことかもしれない。

俺自身は被害者だけど、ピアーの立場を考えるとちよっただけ同情

する。

「さあ、始めようか」

彼女の顔は今までで一番悪い顔をした。

ちよっただけ同情するって言ったけど、訂正。

かなり同情するよ、うん。

俺だったら彼女の尋問、耐えられそうにないもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9602v/>

いちごミルク

2011年10月20日04時29分発行